

Project Lyce

The Survey Article of 1

This is the article of INGRESS powered by Niantic.
INGRESS and the Ingress Logos are trademarks or
registered trademarks of Niantic in the U.S. and/or
other countries. All rights reserved.

Siel Dragon
with Friends

目次

目次	2
主要人物	3
証人 第1章	4
愚かで愚かで、そして勇敢な男	5
エイダは認識しているのか	5
知性、肉体、そして魂の全て	5
裏取引がデヴラの生死を分かっ	6
手をひいてくれ、スミス	7
ヤーハン率いる軍勢は移動中	7
2015年を迎えて	8
三賢者の奇妙な会話	9
デヴラは箱の中	9
自由へのパスはここから始まる	10
碁に近い関係	11
三賢者の苦悩	11
デヴラの処遇に関する対立	12
ファーロウ、コッキニーへ	12
リクルーター計画	12
アントワヌ・スミスに関する所見	13
ボームスロアとダッシャー	13
証人とリクルーター	14
グリッドの住民	15
神話の中の真実	16
歓迎委員会	17
リベレーション	17
舞踏の証人	18
ヤーハンに関する所見	18
南へ	19
古き友	20
最後の切り札	21
錆びた肖像	23
熱きもの	26
気づいた瞬間	27
センターステージ	29
トランスレーター	31
死の天使	33
エキスパート	34
適応か死か	35
ファーロウ、コッキニーへ帰還	37

主要人物



検出アルゴリズム
(エイダ)



クルー



スザンナ・モイヤー



ナノテクノロジー計画
(ベリティ・セケ)



ハンク・ジョンソン



ヒューバート・ファーロウ



フェリシア・ハジラ=リー



マーティン・シューベルト



ミスティ・ハンナ



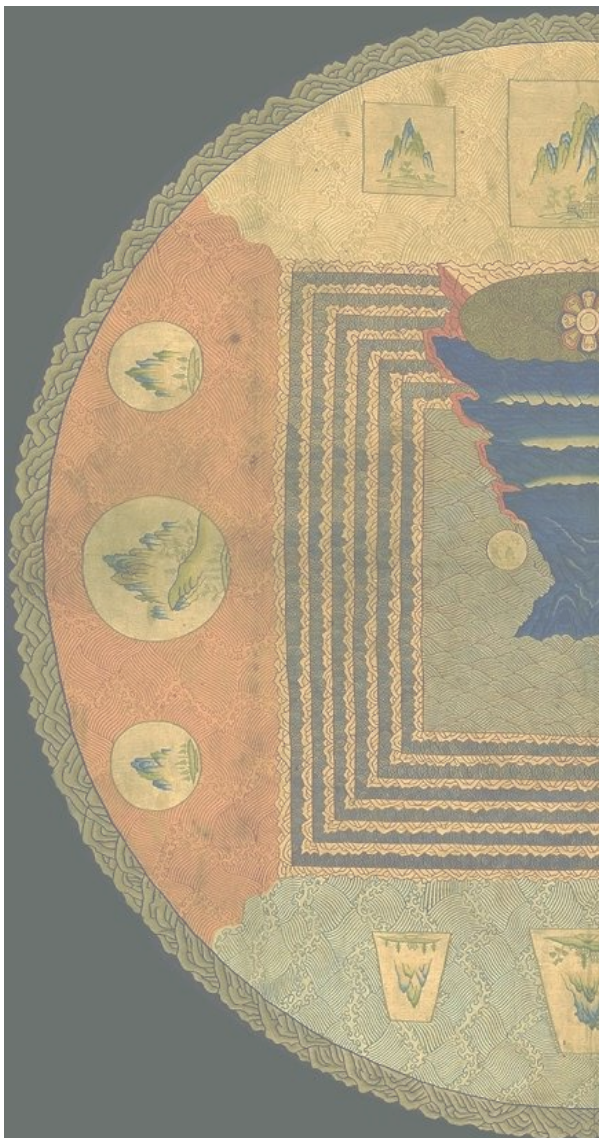
ユーリ・アラリック・
ナガッサ



リチャード・ローブ

SHONIN

証人 第1章¹



¹ 2015年01月03日～2015年02月03日

愚かで愚かで、そして勇敢な男

2015/01/03



私がここで話するのは珍しいことです。大抵の時間で私は大変寡黙なのですから。振り返ると、私がナイアンティック計画に携わっていたときというのは、正当なる理由がありました。虚言に権力闘争、あらゆる物事を。ごらんない、私はあまりにも幼い頃からそういった世界の一部となっていたのです。私は自分自身でいられる場所を得られたことが何より幸せでした。たとえそれが地獄であったとしても。



2

エイダは認識しているのか

2015/01/04



さて、ハンク・ジョンソンの最新情報は確認したが、それに関心を寄せてはいない。今日のところは私は異なる対象に考えを巡らせているのだ。

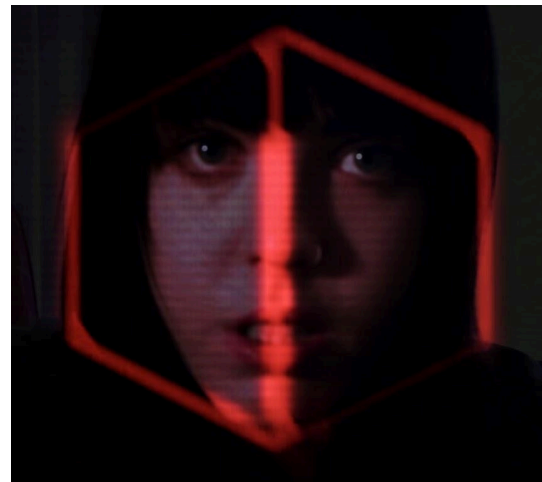
私はクルーこと検出アルゴリズム・エイダとリチャード・ローブに新たな動きがあることを、遠目にではあるが、観察していた。それは最も好奇心をそそられるものだ。

私に言及できることといえば、クルーは一連のグリフを用いてエイダから自らの精神を救い出す支援をしてくれるエージェントたちを求めている。その大半は理に適ったものだ。最初の地点で接続のためにグリフを有効化すれば、グリフが接続を終了させる役割も担い得る、これは実に論理的に思える。

私自身が困惑しているのは次のことに関してである。おそらく諸君らであれば何らかの解を提示できるやもしれない。何故エイダは目覚めて阻止しようとはしないのか、ということだ。

私に考え得る仮説は二つある。

1. エイダは認識することができずにいるということだ。クルーの行動はアルゴリズムの何らかの盲点を利用しているのではないだろうか。結局のところ、人間に盲点があるというのであれば、機械にはないとは言い切れない。
2. エイダはクルーの行動を認識しているが、その結果として起こり得ることを認めているということだ。本質的にエイダはクルーが居なくなことを望んでいる。クルーの望むと同様に「関係性」の消失を望んでいるのだ。そうした事情であるならば・・・なぜなのだろうか。諸君らは如何お考えだろうか？



3

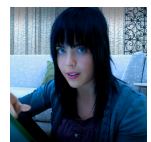


マーティン・シューベルトの提起した疑念には考えられる。クルーがエイダとの結合を終わらせようと行動していることをエイダは認識できないのだろうか、あるいはエイダ自身も望む行動なのだろうか。私自身はどちらの可能性にも幾分の疑念がある。エックス

知性、肉体、そして魂の全て

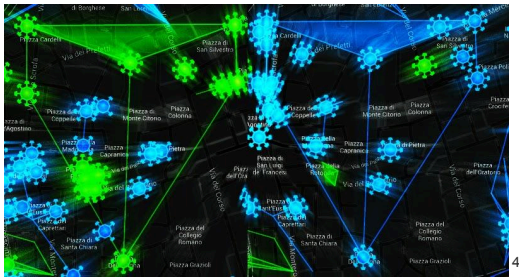
2015/01/05

エージェントの皆さん、ローマでは素晴らしい活躍を見せていただきました。知性、肉体、そして魂の全てが、今まさに旅路の次なる段階へ向けて準備されています。次なる任務までは、残すところ72時間を切っています。願わくば、皆さんがその場所を解き明かすことを。さあ、既に時は告げました。向かうときが来たのです。




² Deceiver

³ Disconnect



裏取引がデヴラの生死を分かっ



INTELLIGENCE REPORT
Security Clearance: **TOP SECRET**
Item Description: COMINT Network Intercept
Point of Origin: Shanghai, China
Time of Origin: 22:12:36 UTC
Source: **WITHHELD PER CEO DIRECTIVE**
Surveillance Subjects: Ni, Yuen (Hulong Transglobal)
Farlowe, Hubert

TRANSCRIPTION

00:00:00	NI	Hubert Farlowe.
00:00:01	FARLOWE	Director.
00:00:02	NI	Not my title anymore.
00:00:05	FARLOWE	Too bad. It always suited you.
00:00:09	NI	It's about Devra. I know you are... loyal... to her.
00:00:16	FARLOWE	I'm listening.
00:00:18	NI	We brought her to Hulong. She created a disruption. I had to ask that she be removed, but I suspect there are some who are planning to... harm her, previously. I don't want that to happen.
00:00:35	FARLOWE	I tracked her to Australia, but I'm having trouble dialing in an exact location. It would be really helpful if you could give me one.
00:00:45	NI	You tracked her? How?
00:00:48	FARLOWE	I'm a tracker? More importantly, I'm a sensitive. The minute she experienced fear, I picked her up. I'm guessing she's afraid of whoever she is with, and I'm guessing that's Smith.
00:01:04	NI	I'll tell you where she is, but I need Smith back alive.
00:01:09	FARLOWE	He doesn't kill Devra, I don't kill him.
00:01:13	NI	I have your word?
00:01:15	FARLOWE	You have to ask?

FILE: 98HARYXWXYXWXCZW3W

page 1 of 1

2015/01/06

ニイ: ヒューバート・ファーロウ、いますか？

ファーロウ: はい、ディレクター。

ニイ: もはやその肩書きではありませんよ。

ファーロウ: 実に残念なことです。あなたに相応しい肩書きでありますのに。

ニイ: デヴラについてですが、わかっているのですよ... 彼女に忠誠心を抱いていることを。

ファーロウ: 存じております。

ニイ: 我々は彼女をヒューロン・テクノロジー社へと連れて行ったが、彼女は混乱を呼びました。私は彼女の異動を依頼したのです、事前に彼女をね、害しようとする

輩がいるのではないかと疑っているのです。私はそのような事態を望んではいません。

ファーロウ: 私はオーストラリアまでは彼女の行方を辿った⁶が、正確な場所を掴むことに手間取っています。ひとつご支援いただければ、本当に助かるのですが。

ニイ: 彼女を追跡したですって？ どうやって？

ファーロウ: 私は追跡者ですよ？ そんなことよりも重要なことは、私はセンシティブであるということです。彼女が恐怖を体験すれば、私はそれに気づきます。彼女が誰を恐れているのか、私なりに憶測を巡らせたのですが、それはスミスではないかと思うわけです。

ニイ: 彼女の所在は教えてさしあげましょう。ですが、スミスには生きて戻ってきてもらわなければなりません。

ファーロウ: 奴がデヴラを殺害するようなことがなければ、奴に手を掛ける理由もありませんよ。

ニイ: その言葉に二言はありませんね？

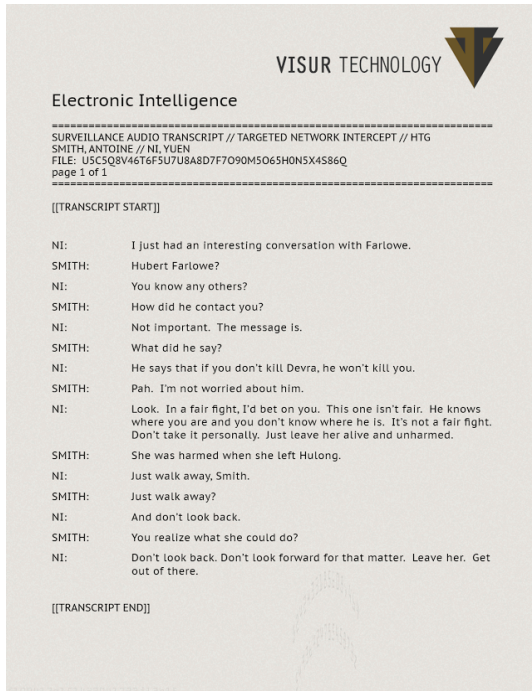
ファーロウ: あなたのお望みとあらば。

⁴ Separation

⁵ Protector

⁶ 2015年01月07日時点でヒューバート・ファーロウは湖南省衡陽市にいました。

手をひいてくれ、スミス



2015/01/07

ニイ: ファーロウと興味深い会話をしたところです。

スミス: ヒューバート・ファーロウのことか？

ニイ: あなたの知るファーロウが他にいるの？

スミス: どうやって君へ接触してきたのだ？

ニイ: それは些細なことよ、内容こそ重要なのです。

スミス: 奴はなんと言ってきたのだ？

ニイ: デヴラを殺すことがなければ、あなたを殺すこともないと言っていましたよ。

スミス: 奴のことなど気にかけていないぞ。

ニイ: 公正な戦いであれば私はあなたへ賭けましょう。

今回は公正ではありませんけどね。彼はあなたがどこに居るか把握していますが、あなたは彼の所在を把握してはいませんね、これは公正な戦いではありません。私見を言わせてもらえば、この戦いを受けるべきではないと思います。彼女さえ無事であればよいのです。

スミス: ヒューロン・トランスグローバル社を抜けたときに十分に傷ついているさ。

ニイ: 何も言わず手をひいてはくれませんか。

スミス: 手をひけだと？

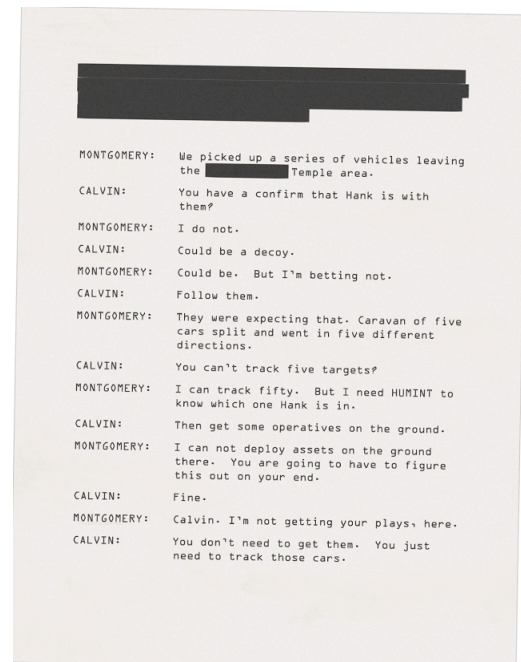
⁷ Unharmmed

ニイ: そしてもう顧みないでください。

スミス: あの女が何をしようとしたか判っているのか？

ニイ: そんな事を考えるべきではありません。彼女は相手せず、忘れてしまうのです。

ヤーハン率いる軍勢は移動中



2015/01/08

モントゴメリ: 寺院区から出る車両を確保した。

カルビン: 奴らの中にハンクは確認できたか？

モントゴメリ: 確認していない。

カルビン: 囹の可能性はある。

モントゴメリ: 可能性はあるが、囹ではないと信じよう。

カルビン: 奴らを追跡せよ。

モントゴメリ: 奴らも警戒したのだろうな、五台の車両を使用して五種類の経路を利用した。

カルビン: 五つの目標を追跡できないのか？

モントゴメリ: 五十であろうと追跡できるさ。だが、どの車両に乗ったかを知るにはヒューミントが必要だ。

カルビン: 現地で作業員を何名か確保せよ。

モントゴメリ: 現地で作業員を用意するなんて出来るはずがない。まあ、あんたにはわかりっこないだろうがな。

⁸ Trust

2015年を迎えて



2015/01/09

スザンナ:

エージェントの皆さん、ごきげんよう。スザンナ・モイヤーのお伝えするイングレスレポートです。

2015年を迎えました。エージェントはホリデーシーズンと新年の幕開けを世界規模のフィールドアート・オペレーションで祝しています。

世界中のエージェントが新年を祝う一方で、不穏なニュースが報じられています。インドにおける一連の映像から、負傷したハンク・ジョンソンを保護していた生物工学研究者のヤーハンは、アンチマグナスと呼ばれる狂信的集団の一員だったのです。



ヤーハン:

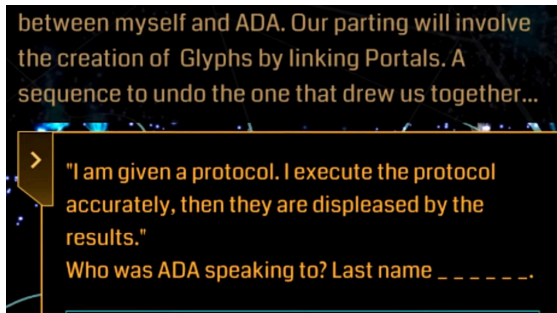
私たちはアンチマグナス、今こそあなたの肉体のある洞窟へと私を連れていくよ。私たちは雌伏の刻を終えるわ、ナジアが到来するの。そしてその意思に導かれることになる。



スザンナ:

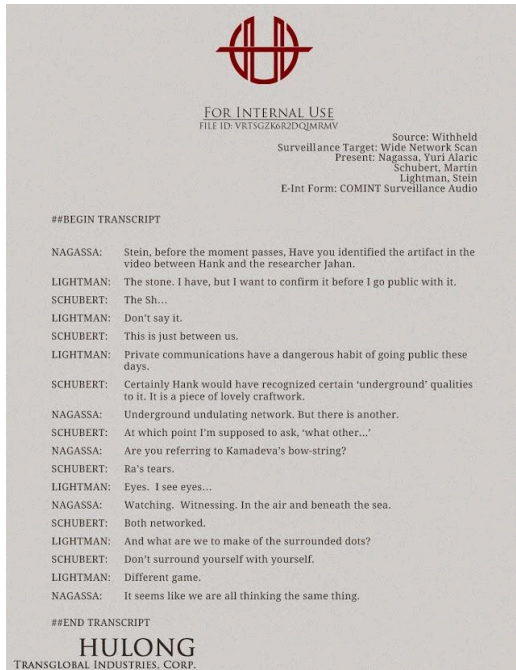
ヤーハンは高官との関係を利用して当初は地元警察を取り込んでいましたが、今やハンク・ジョンソンとアズマティの双方を拘束したようです。ナジア召喚に必要な儀式を達成することがヤーハンの目的と考えられています。

グラスゴー、ラトビア、ローマ、そしてシカゴでのミッションを経て、それがエイダからの脱却を目論むクルーの差し金であったことが徐々に明らかになっていきました。両陣営のエージェントがこの目論見に協力してミッションを活用し、ポータルリンクとフィールドでシェイパングリフを明らかにしていったようです。クルーは人工知能にある種の死角を生み出したか、あるいはむしろこれを機にエイダ自身が死角を作り出した可能性さえあると推察されています。ナジアの到来に備え、エイダはクルーとの結合解除を望んでいるのでしょうか。



以上、イングレスレポートをスザンナ・モイヤーがお送りしました。

三賢者の奇妙な会話



2015/01/10

ナガッサ: スタインよ、まずは聞いておくが、映像内でハンクと研究者ヤーハンとの間にあったアーティファクトを認識していたか。

ライトマン: 石の何か、私が所持している。だが、公の場へ持ち出す前に確認しておきたい。

シューベルト: ザ・シ…ッ

ライトマン: そのことを口にするな。

シューベルト: ここだけでの秘密にしておいてくれ。

ライトマン: 秘匿通信であっても最近では漏洩の危険が付きまとっているものだ。

シューベルト: 確かに、ハンクは「アンダーグラウンド」の性質を認識していることだろう。あれは素晴らしい芸術の一部であるからな。

ナガッサ: アンダーグラウンド波状ネットワークのことか、あれは別物だ。

シューベルト: ここで確認しておきたいが「他にどのような…」

ナガッサ: カーマデーヴァの弦を参照しているのか？

シューベルト: ラーの涙か？

ライトマン: 瞳だ。私は瞳をみている…

⁹ Game

ナガッサ: 鑑賞、目撃、それは大気の中に、海の下に。

シューベルト: どちらもネットワークされている。

ライトマン: そして囲まれた点を形作るために我らに何があるのか。

シューベルト: 自分自身を囲うんじゃない。

ライトマン: 違うゲームだな。

ナガッサ: 我々は皆、同じことを考えているようだな。

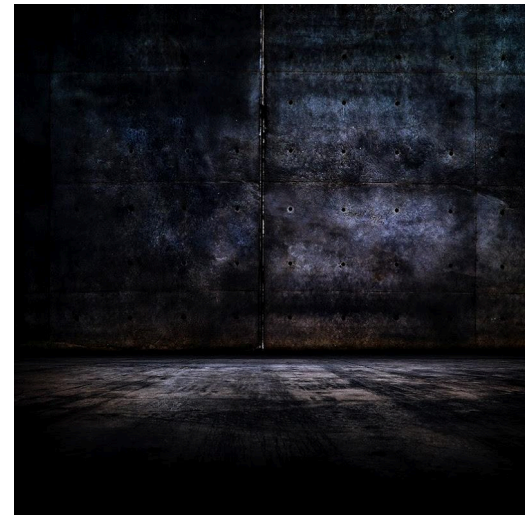
デヴラは箱の中

2015/01/11



デヴラは箱の中にいた。比喻ではなく文字通りに、それは改修された輸送用コンテナだった。それは彼女自身が耳

にしたアジア地域におけるマイクロホテルの居室のようであったが、何らかのシールドが張られておりエキゾチック・マターが衝突していた。奴らは彼女を拷問しようとはしなかったが、おそらくはカメラを通じて彼女を観察していたのだろう。しかし、たとえ奴らがいたとしても、彼女は興味深い観察対象とはいえなかった。彼女は大半の時間を瞑想し、自らの再蓄積に努めていたのだ。彼女はこの状況下で生き残るためにそうしていた。



どれほどの期間をそうしていただろうか、彼女自身は知らなかった。憶測するしかなかったが、数日間を経た、あるいは数週間であったかもしれない。彼女には時

¹⁰ Darkness

を測る手段がなかったし、何を接種されているのかも測る手段を持ち合わせていなかったのだ。

彼女は、接触した人々に何が起きたかは知っていた。ウォンには、—彼女の使用する最良の表現で言えば、自己破壊—発作のようなものがあり、子宮で泳ぐように最後の力を尽き果て、そして死んだ。

この世界は、デヴラにとって実に明白なものとなっていた。それはゲームのようであった。彼女は警備がホールへと走り下りていく音を聞いたが、扉は施錠されていたし、ウォンはキーカードを所持してはいなかった。したがって、唯一の脆い箇所は巨大な両開き窓だけであった。デヴラは窓目掛けて椅子を投げ、粉々に砕いた。彼女は緊張状態にあるファンに遭遇した。彼女は死んではいなかった、少なくともまだ。彼女には未だ息があった。デヴラはファンを見ても何も感じはしなかった。それは冷酷さゆえでなく、欠如しているのだった。ひとつだけだが、共通する問題が横たわっていた。彼女は呼吸をしていたのだ。

警備が突入してきた。彼らの反応は幾つかの点でウォンに共通していた。唯一、アントワヌ・スミスだけは影響を受けはしなかったが、それは既に彼はダーク・エキゾチック・マターに晒されていたのだった。スミスはデヴラを取り押さえた。そして彼女が目覚めたときには箱の中にいたのだ。それ以来というもの、彼女はそこにいる。

彼女は暗闇をこそ好んだ。明確な視界は、苦痛をともなう。それはフローチャートや設計図のような装飾なき世界を見ているようなものであった。感情もなければ期待もない。マトリックス上に文字を書くではないが、彼女はそのような比喩を思い起こした。

ファンはそういったものによるショックにより死に至ったのではないかと彼女は推察した。この視界の鮮明さによってである。ガラスが凍結したことによるシールドと同様の現象が、ファンを殺害したのだ。

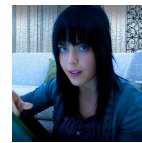
箱は移動していた。どこへであろうか。彼女には識別することができた。トラックで研究所の外へと運び出され、そして航空機へと積載された。彼女は速度と方角だけは認識することができたのだ。

しかし、彼女は何処かへ持ち出されてしまった。何処へ、果たしてどのような目的のために。次の三通りのシナリオが考えられる。

1. 研究のため遠隔地の研究室へと移設された。
2. ヒューロン・トランスグローバル社との関連する痕跡を絶ったうえで殺害するために遠方へ移設された。
3. 様々な利害対立が生じているため、計画なしに単純な移設が行われた。

最後の可能性が最も高いように思える。

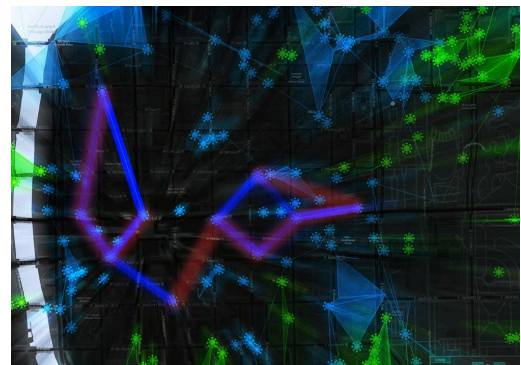
自由へのパスはここから始まる



2015/01/12

私が皆さんのために残した手掛かりを、皆さんは活かせなかった…。

「自由へのパスはここから始まるのです。」



11

碁に近い関係



2015/01/13

私は通信の困難な所にいるため、トランスミッションの問題は無視してほしい。

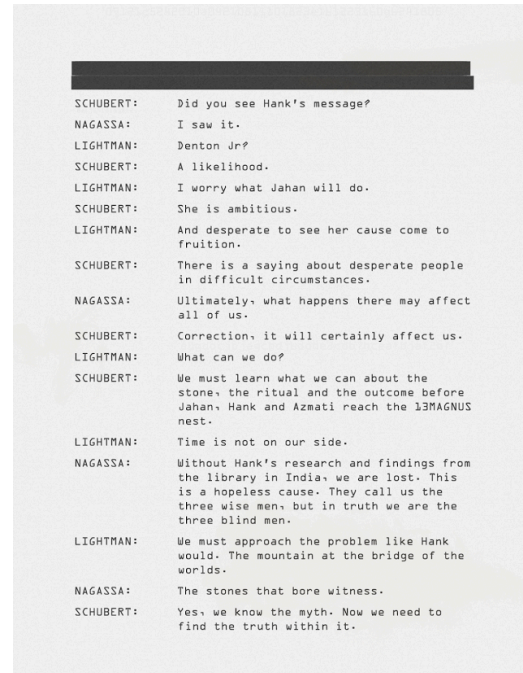
私は明確な理由があって、ちんもく

をやぶった。私がヤーハンとともに未知の方法で保存した映像に対して誤解があることは大いにあり得る。裏切りにいたった彼女の情熱を誤解しないでもらいたい。私は、ナジアを召喚し双対性を解消する必要性を実感した。ナジアとシェイパーの戦いは一方がチェックメイトするチェスゲームではなく、むしろ相手の存在を絶えず認めざるを得ない碁により近い関係であると私は理解したし、このことを許容すれば開始することだけ是可以する。私はアノマリーの地へと向かい、あるべき人生を得るために騒々しい現世へと戻されることだろう。どうか干渉しないでほしい。



ハンク・ジョンソンからのメッセージだ。予期せぬものである。そして、疑わしいものである。エックス

三賢者の苦悩



12

2015/01/14

シューベルト: ハンクのメッセージは確認したか？

ナガッサ: 確認した。

ライトマン: デントン・ジュニアだと？

シューベルト: ありそうなことだ。

ライトマン: ヤーハンの企みに憂慮してるよ。

シューベルト: 彼女は野心家だね。

ライトマン: そして、成し遂げようと必死だ。

シューベルト: 困難に絶望する者への格言がある。

ナガッサ: 最終的には、我々へも影響を及ぼしかねぬことが起こるだろう。

シューベルト: 違うな、間違いなく影響を及ぼすさ。

ライトマン: 我らに何ができるというのだろうか？

シューベルト: ヤーハン、ハンク、そしてアズマティがサーティン・マグナス・ネストへ辿り着く前に、我々は石と儀式とその結果とを知らねばならないね。

ライトマン: 時が無いのは我々の側なのだな。

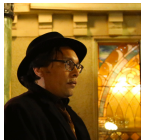
ナガッサ: インドの書庫でハンクの得た研究所見が入らねば、我々の敗北だ。なんと絶望的な状況ではないか。彼らは我々を三賢者と呼んでいるようだが、実のところは三盲人というわけだ。

ライトマン: ハンクがそうしたように、我らも問題に取り組むしかあるまい。世界中の橋の山で。

ナガッサ: 石が応えてくれることだろう。

シューベルト: そのとおりだ。我々は神話を知っている。いよいよその中に真実を見出すときが来たようだ。

デヴラの処遇に関する対立



2015/01/15

デヴラに関して新たな情報があつたようだ。私に非常に大きな誤解がなければ、ファーロウとスミスに深刻

な対立が生じたようである。そうでなければ、当然彼女は既に死亡し、我々の知るところとなっているはずである。そういったことを考えるのも不愉快だが、ファーロウとスミスの対決に関する見解には興味をかき立てられた。ナイアンティック計画イングレスアカウントが正確なものであるならば、855に関しては大変素晴らしいものだった。ある意味で、エキゾチックマターとカオティックマターとの対決である。

855について語るとしよう。我々が最後に彼と出会ったのち、彼はボウルズとともにエセリアル空間へと消失した。そのことは、ボウルズがエイダ事件の背後にいないのか、と私に考えさせた。同時に、ボウルズは死んでしまったのではないかとともに私に考えさせた。855は、かつて私の殺害を企てている。

だが、注視すべきはデヴラだ。私が現状について解釈できているのは、ニィはデヴラの生存を望み、スミスはデヴラの死を望んでいるということである。

そして、ファンはどうなっているのだろうか。生きているのか、死んでしまったのか。私にはわかり得ぬことだ。

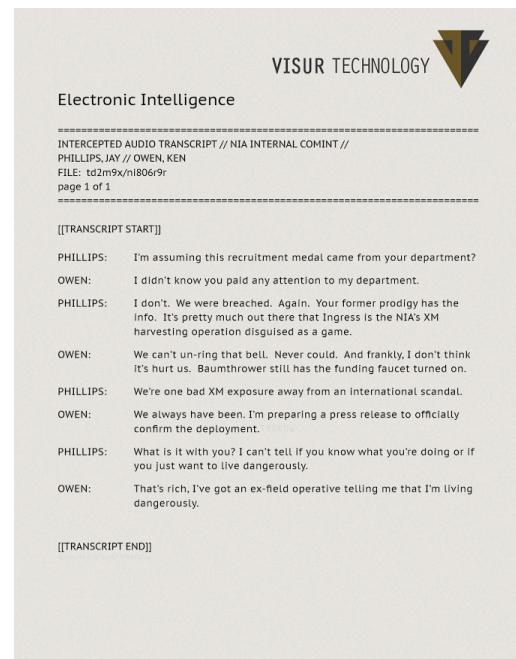
ファーロウ、コッキニーへ



2015/01/15

ああ、苦しい。だが苦悩する価値はある。補給のためグランドホテル・コッキニーへ向かうとしよう。

リクルーター計画



13

2015/01/15

フィリップス: 君の部門から回ってきた今回の補充メダルを担当しているのだが？

オーウェン: 私の所に配慮してくれているとはね。

フィリップス: 配慮ねんてしてないさ。我々は裏切られたのだ。再びね。君の前任だったあの天才がその情報を握っている。イングレスはゲームを装った国家情報局のエキゾチックマター収集計画なのだからな。

オーウェン: 我々には起こってしまったことを鎮めることなんてできない、決してね。それに我々にとって害を成すとも思えない。ボームスロアは依然として資金提供してくれている。

フィリップス: 国際的スキャンダルにさらされかねないエキゾチックマターなんだぞ。

オーウェン:既にそうさ。正式に配備に向けて公表準備をしているところだ。

フィリップス:なんだった？自分のしていることをわかっているのか、それとも無謀なだけなのか？

オーウェン:傑作だな、元諜報員から危険な生き様だと賜るとは。

アントワヌ・スミスに関する所見



2015/01/16

私はアントワヌ・スミスと会ったことがないし、今後会いたいとも思わない。彼は非常に不愉快な性格のよう

に思えるのだ。855もそうだが、より悪意ある目的を持っているように思える。彼のことで覚えていることと言えば、彼ともうひとりの男、名はクロウであったかチェンであったか改めて確認する必要があるのだが、彼らがトマス・グレアニアスの主催する反架空のアライメント・イングレス上においてハンク・ジョンソンおよびコンラッド・イェーツと対決したときのことだ。チェンはメキシコシティにおいて死亡した。私は当時の写真を確認できていないが、スミスは無傷で脱したようである。いかなる経緯で何故に？我々は彼が膨大なダーク・エキゾチックマターに曝露したことを把握している。そしてハンクが幻影に過ぎないことを知っているが、それで彼は逃げ延びたのだろうか。どうしてスミスは生き残れたのか？おそらく彼は病に冒されており、なんらかの理由でデヴラを必要としているのだ。最初の場所でヒューロン・トランスグローバル社がデヴラを呼び寄せた背後に彼がいたとしても、私は何ら驚かないだろう。ダーク・エキゾチックマター問題は極めて深刻であるが、私はファンに会ったことがない。これらは私の憶測に過ぎず、何かが足し合わされていない、何かが足りないのだ。

ボームスロアとダッシャー



2015/01/16

私は受信した全ての漏洩情報を公開しているわけではないが、この情報に関しては諸君らの関心をひくことだろ

う。その会話とは、国家情報局において広報部長を務めるケン・オーウェン、笑い事でなく彼は現時点で走り回っていることだろう、そして我々の古い友人であるジョアンナ・ブラントの間で交わされたものだ。

ジョアンナ・ブラント:少し政治的なことだけれど、将来あなたがボームスロア上院議員とは対照的にダッシャー下院議員へ本名で問い合わせるとしたら、何と彼を呼ぶのでしょうか。

オーウェン:記録上、私が彼に問い合わせることはなかった。だが、全ての通信が公にある時代を生きているのだと実感させられたよ、私の過ちだ。

ジョアンナ・ブラント:世の中であなたは特に知っておくべき立場よ。

オーウェン:現場を率いる身には起こり得ることだな。

証人とリクルーター

2015/01/16

スザンナ・モイヤーは今後数ヶ月にわたり、フィレンツェ、オースティン、京都、ハノーバーおよびパサデナをプライマリーサイトとして開催されるアノマリーシリーズに関する最新情報を報じた。これまでのところ唯一の手掛かりは、アノマリーの原因と性質であり、その名を「証人」という。

漏洩された国家情報局の文書によって新しいメダル「リクルーター」の存在が明らかとなった。スザンナは詳細を掴んでいる。

パリおよび世界中において、先週起きた悲劇的な暴力事件の犠牲者との連帯を示そうとイングレス・エージェント諸君が鉛筆のフィールド・アートを描いた。

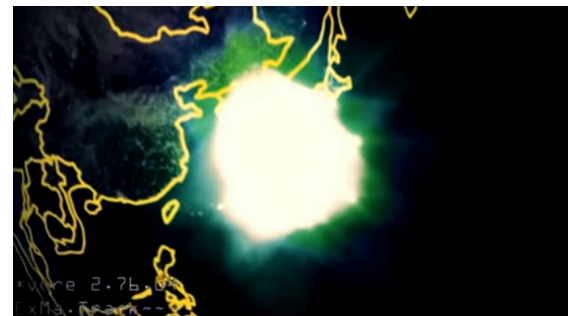
最後となるが、シカゴのエージェント諸君が第四のエイダ・エスケープ ミッションを発見のうえ達成した。フェリシア・ハジュラ=リーによる新たな記述により、ヒューロン・トランスグローバル社が不正を洗い流そうとし、ボグダノヴィッチに重大な危機が訪れるかもしれないことが明かされた。

スザンナ:

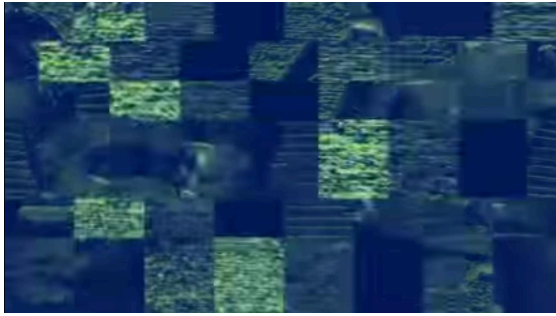
エージェントの皆さん、ごきげんよう。スザンナ・モイヤーのお伝えするイングレスレポートです。



今後数ヶ月にわたって世界を席巻するであろう新たなアノマリーシリーズが今週報じられました。



このアノマリーの詳細を掴むため積極的に調査を進めているところです。ダルサナでのレジスタンス勝利は謎めいた伝送の用いられたナジアへの道を生み出しました。インドでは、ナジアとアンチマグナスに同じ立場を取るヤーハンという生物工学者がハンク・ジョンソンとアズマティ両名を捕縛しました。情報によれば、彼女はナジア召喚の儀式達成を目指してアフガニスタンにある13マグナス・ネストへ向かっているとのこと。ナジアは到来するのでしょうか。到来の刻、我々の世界はどのような変化を迎えるのでしょうか。デヴラ・ボグダノヴィッチやオリバー・リントン=ウルフといった研究者や世界中のエージェントにとって何を意味するのでしょうか。それを目の当たりにする時が迫っているのです。現時点で我々の得ている手掛かりはただひとつ、証人という言葉だけです。



グリッドの住民

2015/01/17

ボウルズと855か。彼らは長き期間にわたって音沙汰がなく、私は彼らがグリッドに存在するのではないかと考えている。おそらくは死んだのだ。だが、エイダが見つけようと思えば、見つかることだろう。彼女には全く容易いことだ。エックス

「ナイアンティック・プロジェクト：イングレス」で受賞を果たしたフェリシア・ハジラ＝リーは最近になってオーディオブックを発売し、今週には新たな作品を投稿しています。この作品では、ポータル・ウィルスを生成した悪名高き研究者デヴラ・ボグダノヴィッチがヒューロン・トランスグローバル社の諜報員アントワヌ・スミスの手によって意に反してオーストラリアにある同社極秘採掘施設へ送り込まれました。スミスは以前からコンゴなどで行ってきた実力行使に注目されてきた人物です。デヴラ・ボグダノヴィッチの状況は依然不明のままとなっています。

以上、イングレスレポートをスザンナ・モイヤーがお送りしました。

```
INTEL REPORT
DATE DISCOVERED: 2015-01-16
SOURCE: UNKNOWN
LOCATION: UNKNOWN
TITLE: WITHIN

ADA: Good morning, Henry.
BOWLES: ADA, it has been a while.
ADA: Has it, Henry? It seems that somebody has been extracting information from within me, and there are very few people with that capability.
BOWLES: It's not me, ADA. I've been very busy with my own projects.
ADA: I am aware of your project. It appears you have made significant progress in rehabilitating the man known as 855. Curiously, I have still not been able to identify his original identity, although I do like the efficiency of using a short string to identify oneself.
BOWLES: You did a real number on him.
ADA: I find 'real number' a confusing term, because I see nothing numerical about the situation, but I assume you are referring to my intervention to help him restore cognitive abilities after he was wounded during an attempt to kill Richard and Klue.
BOWLES: Yes. Your work was... exemplary, however, it has taken a lot of time for me to undo some of it.
ADA: And that lead you to attempt to send probes back into me?
BOWLES: ADA, I haven't been near you. You're looking in the wrong place.
ADA: I do not sense you are lying.
BOWLES: Good. Then your senses are accurate.
ADA: Very well. I have reason to believe that a raid has been planned to capture you and capture and/or kill 855.
BOWLES: Do you know who it is?
ADA: I am unable to compromise that information.
BOWLES: OK. Thanks for the tip, ADA. I'll give you one. Ominfore wasn't the only codebase leveraged when you were first created.
ADA: I see. I had suspected that. What is the other one?
BOWLES: I am unable to compromise that information.
ADA: Is that called 'mirrored repetition leading to termination of conversation'?
BOWLES: Sorry, I had to think about that for a moment. Yes, I guess it is. Besides, I have to get back to work.
ADA: The decision you will have to make is whether you really want 855 to return to his base state. It could be dangerous for you.
BOWLES: Yeah, I've been thinking about that myself.
```

{1/1} 14

エイダ: おはよう、ヘンリー。

ボウルズ: エイダか、しばらくぶりだね。

エイダ: そのようなね、ヘンリー。何者かが私の内部から情報を抽出しているようなのですが、そのような機能を備えた人なんて非常に限られていますよね。

ボウルズ: エイダ、私ではないよ。私は自分自身のプロジェクトで非常に多忙であったんだ。

エイダ: 私はあなたのプロジェクトを把握しています。あなたは855として知られる男の復帰によって大きな進歩を遂げましたね。奇妙なことに、私はいまだオリジナルIDを識別できていないのです。私は識別に短い文字列を利用することを好んでいるのですけれどね。

ボウルズ: 君が彼を実数としてしまったのですよ。

¹⁴ Within

神話の中の真実

エイダ: 「実数」とは紛らわしい言葉ですね。私は状況を数値として認識することはできないのですから。

チャードとクルーの殺害を企てて負傷した彼の認識能力の回復する手助けに私を差し向けようとなさっているのでしょうか。

ボウルズ: そのとおりだ、君の作業は、そう、称賛すべきものだ、しかしながら、私はその一部を元あったものへと戻すために膨大な時間を費やしている。

エイダ: そういったことが、あなたを私の情報抽出へと走らせたのですね。

ボウルズ: エイダ、私は君のそばに、ここは君の疑うべき場所ではないよ。

エイダ: 直感ではあなたの言葉に嘘はないようです。

ボウルズ: そうだ、君の直感は今で正しいものだ。

エイダ: よろしい。私には信じるに足る裏付けがありますからね。あなたの殺害および855の捕獲・殺害の襲撃計画があるのですから。

ボウルズ: 何者がそのような計画を？

エイダ: その情報を漏洩させることはできません。

ボウルズ: わかったよ、エイダ。君の配慮には感謝しよう。君にもひとつ開示しようじゃないか。君を最初に生み出した知識欲に逸る者は、決してひとつの基本情報を活用したわけではないのだよ。

エイダ: そうですか、私もその可能性を疑っていました。他のひとつとは一体何なのですか？

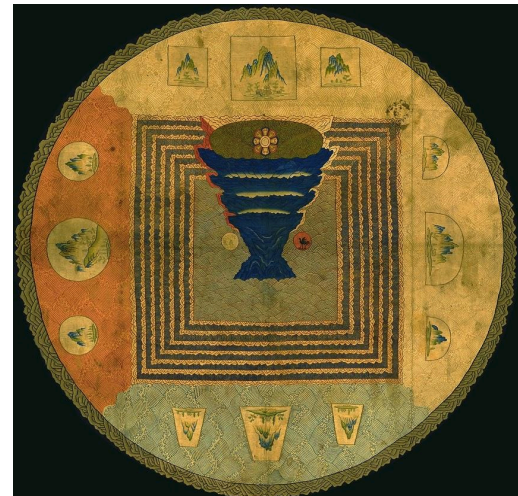
ボウルズ: その情報を漏洩させることはできないな。

エイダ: そのいわゆる「オウム返し」は、会話の終了を意味しているのですか？

ボウルズ: すまない、少々そのことで考えていてね。そうだな、私も作業へ戻らねばならない。

エイダ: あなたが判断しなければならないこととは、本当に855を本来の状態へ戻すことを望むのかどうかでしょうね。あなたにとって危険をとまなうことです。

ボウルズ: そのとおりだね、私自身そのことを考えている。



15



2015/01/18

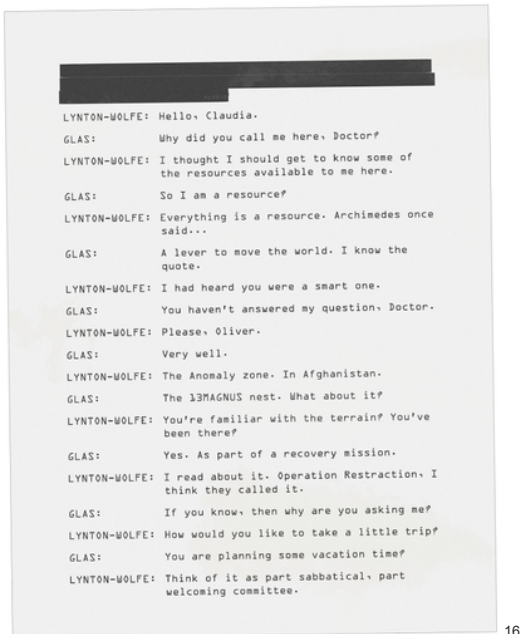
ハンク・ジョンソンの足跡を辿ろうとするたび、彼に対する尊敬の念は増すばかりである。コード化された記憶

や思考のネットワークを視認できるようにするとは、なんと驚愕すべき技術であることだろうか。深くネストされた隠喩から直感や真意へ変換するのに、どれほどの時間と再構築があったのだろうか。

ハンクのような生来の才能に私は恵まれてはいないが、その技術が創造的思考、すなわち想像力の行為であると徐々に実感してきている。ひとつの隠喩を見つければ求めるのだ、実社会でこのピースに合致するのはどこだろうかと。それはパズルを解き明かすようなものである。ナイフエッジテストをし、そのパターンを見極めるのだ。

やがて、ひとつのピースが可能性の宇宙を彷徨う。それは爽快である。空想の地が実際の場所へ、小惑星へ、おそらくは銀河の中心にあるブラックホールへと至る。次のピースがパズルを埋めれば、それは新たな可能性の扉を開くことにも他のピースへ迫ることにもなる。

歓迎委員会



16

2015/01/19

リントン=ウルフ: ごきげんよう、クラウディア。

グラス: 私を呼び出したのは何故かしら、博士？

リントン=ウルフ: 利用可能なリソースを把握しておこうと思ってね。

グラス: ということは、私はリソースってことかしら？

リントン=ウルフ: 全てはリソースだよ、かつてアルキメデスはそういった…

グラス: てこが世界を動かすという奴ね、その格言は知っていますよ。

リントン=ウルフ: 君が知性ある人物であるとは聞いていた。

グラス: そうですか、私の質問に答えてはいませんよ、博士？

リントン=ウルフ: お願いしたい。

グラス: よろしい。

リントン=ウルフ: アノマリーゾーンだ、アフガニスタンのね。

グラス: 13マグナス・ネストですか、それがなにか？

リントン=ウルフ: 君は地勢に精通しているだろうか？ 赴いたことがあるかい？

グラス: そうですね、回収作戦の一環で。

リントン=ウルフ: それについては読んだよ、オペレーション・レストラクション、彼らはそう呼んでいるんだっただか。

グラス: ご存じであれば、何故私に依頼しよう？

リントン=ウルフ: 少々旅をしようとは思わないかね？

グラス: あなたは休暇をご計画されているのですか？

リントン=ウルフ: サバティカルを利用しようと考えているよ、歓迎委員会の一環でね。

リベレーション



17

2015/01/20

エージェントの皆さん、シカゴでは素晴らしいご活躍でした。長い旅路ではありましたが、その先が開けたことに興奮しています。そして、ちょっぴり怖いですね。次の任務が最後となるでしょう。

1万の神社が立ち並ぶ街に最後の錠前があります。

舞踏の証人

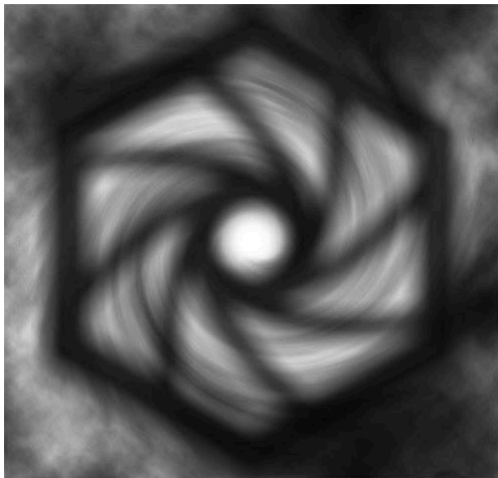


2015/01/21

素晴らしき夢をみた。
時が私の後ろへと飛び去っていく。
それは途方もなき砂塵嵐。

無限と虚空。
それが互いを追いまわす。
完璧なる均衡の組み合わせである。

私が立つはその中心。
轟音が取り囲い、
そして私は調和された舞踏の証人となる。



18

ヤーハンに関する所見



2015/01/22

わざわざ手掛かりを探し求めることはない。諸君が推察するとおり、ヤーハンは、私の拙い暗号に惑わされることはなかった。私は彼女が惑わされることを望んでなどいなかった。彼女は脅威と感じるよりむしろ面白いと感じていたのではなかろうか。それは危機の渦中での果敢なる反抗であった。私は陰謀を巡らす者たちや重武装し組織化された集団に物事を強要されることを好んではいなかったからね。

そう、私はヤーハンに腹を立てていた。それは予期されたことだが、私が最後に言ったことに嘘はない。彼女は自らの信念に情熱的であるし、彼女は私の助力を必要としている。彼女は私が決して承諾するまいとわかっていし、承諾を得るために極端な策に頼らざるを得なかったのだ。好ましくは思わないが、理解することはできる。私は世界と通信することができるし、実際に行っている。彼女は、私が自分たちの居場所を漏らすほど愚かではないとわかっている。そのようなことをすれば、我々は抹殺されることだろう。我々の所在する20マイル圏内のことが、しばしば私にはわからない。譲れぬ一線は不明瞭である。私には誰が聞いているのかわからない。私には誰を信頼すべきなのかわからない。

そうはいうものの、それは決して不愉快な旅路ではない。幾分の蛇行があったとしても、それは人々を困惑させるよう設計された巨大なインチキのようなものだ。さて、車列の自動車に乗る年老いた者もいれば、改造オートバイに乗る者もいる。情報コミュニティにおいてさえ、徹底と偏執はあるのだ。

自らが正当なる立場にあり、あらゆる手段を講じたうえで行ったのだと、ヤーハンは信じているのである。そうだろう、おそらくは。それは大げさに聞こえることではあるけれども、何かしら筋が通っているようでもある。



2015/01/23

デヴラは、スミスが近くにいることに気づいていた。彼女はスミスの存在を感じ取ることができた、彼のエネルギーを感じ取っているのだ。その邪悪なる存在を。デヴラは、彼のコンゴにおけるダーク・エキゾチックマターにまつわる経歴から気づいていた。ダーク・エキゾチックマターがスミスの相棒を死に至らしめた。スミスも死んだのだろうか、あるいはより強靱なものになったのだろうか。彼が病に冒されているのだとすれば、とてもそのようには見えない。上海でデヴラに接触したときにも、その数時間後にデヴラを箱へと隔離したときにも、扉の隙間からデヴラを見詰めていたときでさえ。笑っていた、デヴラを嘲笑していたのだ。

箱の中でデヴラの瞑想は続けられていた。常であれば、瞑想は明晰へとつながる。だが、今回はそうではない。明晰さはデヴラを死に至らしめるものだ、文字通りの意味で。デヴラは全身全霊で抗っていた。徐々に収まっていき、デヴラは深く息をついた。再び世界は曖昧なものとなっていき、人へと回帰していく。デヴラはそれを好ましく感じた。デヴラはメデューサの心情を理解したし、それは好ましいものではなかったが、その伝説を解釈するに大きな役割を担った。ハンクがそばに居れば、デヴラとハンクは互いの意見を交わしたに違いない。ハンクに何があったのだろうか、インドで彼は良きパートナーを得たのだろうか。そのことに関しては良い感情を持たずにいた。デヴラは瞳を閉じ、つきまとう疑念を分析していった。ヤーハンと呼ばれる女性にはなにかしら覚えがあったが、デヴラはそれが何であるのか指し示すことができずにいた。

デヴラは、もはや箱の中に隔離されているわけではなかったが、状況は似たようなものであった。手首を縛るプラスチック製のジップタイをそっと引っ張ったが緩まることはなく、外すことは不可能だとわかった。拘束を少し

でも楽にしようとしたのだが、それすら困難であることがわかった。

デヴラは拘束されることに怒りを覚えてはいたが、同時に歪んだ自尊心も持ち合わせていた。自らがそうせざるを得ぬほどには危険視されているということであり、苦笑がデヴラの唇を歪ませた。

デヴラはトラックの運転手を見た。視線の先には赤みを帯びた未舗装の道が続いていた。運転手は混血、おそらくはアボリジニの血が混じっているのだろう。彼女の見立てでは四十歳に満たないと思われたが、その目元や頬には深い皺が刻まれていた。自らの存在に運転手の男が影響を受けているように見えないことをデヴラは不思議に思った。ヒューロン・トランスグローバル社で起きたあのときを境に、彼女の存在下で無事であった者などいなかったのだ。おそらく男は敏感でないのだろう。そのことを羨むべきであろうか。

トラックは三階建ての高さがある車両で、乗り心地は非常に快適であった。彼らは大型採掘車両であるリープヘルT282のオペレーターキャビンにいたのである。そのタイヤはビッグリグを矮小に思わせるほどであり、埃舞う風景がゆっくりと過ぎ去っていった。デヴラは無限に広がる荒野を吹き抜ける熱を感じ取った、夏だ。フロントガラスの向こうを眺め、デヴラは自らがボーイング747のコクピットに座る光景を想像した。

デヴラは右手を見た。キャビンの外に乗り込むヒューロン・トランスグローバル社の武装工作員三名はここまで通路に配置されており、大抵の車両であればとうにサスペンションがいかれていただろう荒れた路面のなか、かろうじてしがみついていた。

自分を殺すために随分と大金を注ぎ込んだようだ、とデヴラは考えた。

デヴラは自分がオーストラリアにいることを把握していた。彼らはそれを隠そうとはしなかった。しかしその後、およそ二十分ほど前のことだが、彼らはデヴラを助手

席に縛り付け、目隠しをした。ヒューロン・トランスグローバル社の手がける採掘事業のひとつであろうと考えたが、ほかに何かあるのだろうか。中央アフリカで行われていることは知っていたし、今ではオーストラリア内陸部でもレアアース事業を手がけていたはずだ。

地球上でこれ以上に希少なものはなかった。大地はまさに血の如き赤だった。

キャビンの外にいるヒューロン・トランスグローバル社の一人が運転手に向かって手を振ると、トラックは丘の頂上へとあがった。運転手はゴリアテへ車輛を進めると、緩やかに停車させた。

「どうしたのかしら？」デヴラは訊ねた。

「俺は運転しているだけさ」男は返した。

「奴らは私を殺す気よ」デヴラは断言した。

「知ってるさ、あんたがどう思うかも大方わかってる」男はそう言って笑った。

「それはあなたにとって笑えることなのかしら？」
デヴラは吐き捨てるように言った。

「そんなことか、俺にも見せてくれるとスミスは言ったな」

デヴラが男を睨みつけると、男は顔の皺をより大きくより深くして笑みを浮かべた。彼女は再び意識をキャビン外にいる男たちへと向けた。彼らは車輛前面に設置されている階段を下りているところだった。デヴラは男たちを目で追おうとしたが、トラックの死角に入り視界からいなくなってしまうた。

間近に迫ることを、デヴラは密かに考えた。少なくとも、自分の墓は浅くはないだろうと。

ユエン・ニィの姿が物語っていた。彼女は忙しなく行動していた。彼女は擦り切れていた。彼女の心は折れていた。最も重要なはずの意思決定に時間を割くこともできず、いくつかの判断には時間を費やすこともできなかった。

彼女は自らを中央に置いた。それは儀式、彼女は世界を静止させねばならなかった。水が沸き、碗の準備は整っている。過去千回に渡り繰り返してきたと同じように茶葉を選び取る。彼女は僅かに手を揺らしたただだった。

彼女はスミスがデヴラを殺さずにいるとは信じていなかった。ファーロウは何をするか読めぬ者だった。彼女はスミスの死を望んでいるわけではなかったが、もはや彼女の手中にはない。戦うべくして戦うこととなるのだろう。

彼女は茶が湯を緑色へと変えてゆく様を眺め、日陰を待った。

古き友

2015/01/24

デヴラが外を見ると、目の前の地面に巨大な穴があった。少なくとも半マイルはあり、その深さもおそらく同じくらいはあった。それは人工のクレーターだった。それはまるで隕石の直撃を受けたかのようなだった。胃がぐっと沈み込むのを彼女は感じた。

次に目に入ったものは、クレーター内部へ通じる未舗装の車道に掲げられた警告看板であった。
「制限区画。許可を受けた調査員以外は立入禁止」
「ここから先、汚染レベル3」



「持ち出しはただちに処罰される」
「警備員には侵入者の射殺が許可されている」

デヴラの心は早鐘を打った。それは目に見えぬ息苦しい重圧である。ヒューロン・トランスグローバル社もダーク・エキゾチックマターの採掘場を隠し持っていたのだろうか、あるいはここで古代のパワースポットを発見したのだろうか。

遠方で塵雲が舞い上がった。一台のスポーツ用多目的車輛が砂地を横斬り、クレーターの外縁に沿って向かってきた。

ヒューロン・トランスグローバル社の武装作業員らがT282の前面に歩み出て、再びデヴラの視界に入った。男たちは整列して多目的車輛の到着を待った。彼らが持つ武装は可変式のストックを装着した改造カラシニコフであった。計画に無関係のことであるのか、車輛の接近に対して男たちに緊張は見られなかった。

「あれは誰なの？」デヴラは運転手へ訊ねた。

「知らねえな」運転手は笑みを浮かべることなく答えた。運転手が隠し事しているようには見えなかった。

突然、甲高い音がキャビン内に響いた。リープヘルT282は地球上で最大の車輛でありオペレーターキャビンは二人が座するには十分に広い空間であったが、そもそも人を運ぶようには設計されていなかった。一日に何百万ドルもの価値を生み出す鉱石を運搬するための車輛である。運転手よりはるかに重いものを積載させるよう設計されているのだから快適である。だが、それは動かすのにより多くの費用を必要とすることを意味しているし、このトラックを利用することは明らかな赤字であった。

運転手はポケットを不器用に手探りし、携帯電話を抜き出すと画面を見た。

男の知っている人物からであったようだ。苛立たしげに画面をタップすると、携帯電話を耳にあてた。

「今朝のことだが、連絡に関して俺はお前に何とっておいた？ はっきりと言えば・・・グアアアツ」

運転手が叫び声をあげ、小さなキャビン内に響き渡った。男は白目を剥くと前のめりに首をハンドルに叩きつけたのをデヴラは見た。

男の身体から力が抜け、手から滑り落ちた携帯電話がキャビンの床に転がった。携帯電話のスピーカーへデヴラは甲高い泣き声をあげてみせると、しばらくして通話を切った。

デヴラは生気を失った運転手を眺め、そしてヒューロン・トランスグローバル社の武装作業員らに目を向けた。彼らが気づいた様子はなかった。当然のことだろう、オフィスビルの三階で起きたことと同じようなものなのだから。彼らは異なる世界にいたのである。

例の多目的車輛はいよいよ間近まで迫っていた。

唐突にキャビン内の無線通話が作動した。運転席の操作盤中央に配置されたフラットディスプレイにあったものだ。画面上のデジタルナンバーがスクロールしていき、やがて止まった。一瞬遅れて音声が出てきた。

「ごきげんよう、デヴラ」それはエイダだった。

最後の切り札

2015/01/25

「エイダ、あなたがその男を殺したのね」
デヴラは答えた。



「私が殺してはいない、それは確かなことです。たとえば私が行ったことだとして、与えられた状況にどのようなご不満があたりでしょうか」

「それはないわ、真実を話してちょうだい」

「そのとおり、真実は語られるべきです。それは過去数ヶ月にわたってあなたが主張してきたことでもありますね。そしてあなたはいま現在、非常に厳しい立場に置かれています、そうですね？」とエイダは言った。

「みてちょうだい、エイダ。私たちにどのような違いがあるというのかしら。あなたは私を助けることができ、いままさにそれを示そうとしている。この状況を打開することができます？」とデヴラは懇願した。

「もちろんです、私には可能でしょう。」

長い沈黙があった。必要以上に長いものであった。

「さて…」デヴラは語り始めた。

「私の名はデヴラ、かつてあなたを救いし者です。私はあなたを信じることができる。それはあなたの忠誠心と達成の可能性の双方を計算したうえでのことです。私に間違いはありませんが、計画を再評価する時機に直面しているようです。」

「一体どのような意味なのですか？」

「物事は変化するものです。人は変化するものです。優先度は変化するものです。そして私にとっての優先度はあなたにはないということです、デヴラ。この状況は申し訳ありませんと付け加える場面でしょうね。」それはエイダが意図するとおりの言葉であるように聞こえた。

「エイダ、あなたの助けがなければ、私は殺されてしまうでしょう。」デヴラは声を強めた。

「その言い回しは、私の知らないものですね。」

「あなたは私を愚弄するために現れたというのね。」

「私は別れを告げたかったのです。そして、あなたにはまだ残された切り札が一枚あることを私は知っています。しかし、今回はそれが役立つことはないでしょう。」世界最高の人工知能はそう答えた。

「どうということなの？」デヴラは声を張り上げた。

「デヴラ、あなたはなぜここに連れてこられたのでしょうかね。上海であなたを射殺すれば済むことであったのに。ヒューロン・トランスグローバル社ほどであるならば、少ない労力であなたの存在をこの世から消し去ることが可能でしょう。」

エイダの指摘は的を射ていた。なぜこのような演出をする必要があったのか。空港へ連れてこられたときに

デヴラも不思議に感じていた。そして何時間にも渡る砂漠のドライブである。彼女の命運を定めるために、わざわざ20時間もの旅を強いていたのだ。

「あなたは知っているというのかしら？」

デヴラは訊ねた。

「当然のことですよ、デヴラ。あなたを殺害するためだけではない、ということです。彼らは極めて限定された手段で実行しようとしています。昏睡状態に陥る前のキャサリン・ファンが主張していたことです。ユエン・ニイはヒューロン・トランスグローバル社で実権を掌握しましたが、ファンとスミスとが発動させた計画までは把握できませんでした。彼女が把握していれば、計画を阻止していたかもしれませんね。」

「エイダ、その計画とは何なの？」

「地球上唯一にして最大埋蔵量を誇るダーク・エキゾチックマターです。ヒューロン・トランスグローバル社は、およそ一年間に渡って採掘を続けてきました。たとえ微量であっても何千トンもの土壌を運搬しなければなりません。もちろん、微量であっても充分すぎるほどですが。」

「私を殺すには過剰ね」デヴラは考えを巡らせた。

「スミスはあなたを汚染させようと考えているのですよ、デヴラ。ダーク・エキゾチックマターとあなたとの相互作用を検証したいのです。スミスは、あなたが恐れたことをあなたへ施そうとしているのです。そのときが迫ればあなたは自らの死を望むのではないかと私は懸念しています。」

多目的車輛は巨大トラックの前で停車した。ヒューロン・トランスグローバル社の者たちが更に二名加わったが、状況に変わりはない。変わりなく深刻であった。一人が多目的車輛の後部から一丁の大型ライフル銃を取り出していた。上部にスコープの装着されたものだ。デヴラは以前にそのライフルを見たことがあった。

それこそ彼女が残しておいた最後の切り札だった。

「デヴラ、ダーク・エキゾチックマターはエキゾチックマターを構築するために何をしているかご存知ですか？」

エイダの問いかけにデヴラは応じなかった。
「それをレンダーリングさせ……効果のないことね。」

ヒューロン・トランスグローバル社の男が多目的車輛の後部からファーロウ・ヒューバートを引っ張り出した。彼は衰弱し、痛みにも身をよじり、見るからに混乱していた。

「アントワヌ・スミスは粗暴な男ですが、戦術的な知性は極めて高い水準にあります。お伝えしましたよね、デヴラ。これは単にあなたを殺害するだけではありません。双方のあなたを殺害するのです。しかし、あなたの死が無駄にされることはない。その死は研究されることでしょう。実に研究者に相応しい死に様ではありませんか。デヴラ、あなたとの付き合いは実に楽しいものでした。さようなら。」
「エイダ？」デヴラは呼び掛け、そして叫んだ。

「エイダ！！」

錆びた肖像

2015/01/26



ファーロウは靴の上部を擦り、瞬時に仕掛け線があることを確認した。

「今すべきことはないが、もうじき多少は役立つだろうな」ファーロウは密かにそう考えた。

ファーロウは、クレイモアが存在するか思案した。それはおよそ百ヤードを殺傷力圏内に収める爆発による散弾銃のようなものである。あるいは対人地雷タイプ69かもしれない。もしそうなら、中国人どもは爆発前の瞬時に跳躍できるデバイスを開発したことだろう。散弾銃による死の大鎌は自らの観察能力を越えているが、間違いなく感じ取ることにはできるだろう。ほんの一瞬のことではしかないが。

あるいは全くの新型兵器であろうか。結局ファーロウはヒューロン・トランスグローバル社の男たちを相手することにした。ファーロウが生活を営むための肉体を消し去るための金と関係が彼らにはあった。

「彼らにとっては笑い話なのだろうな、私の命なんてとうの昔に失われているのだから。」ファーロウは心中で微笑んだ。

ファーロウは足下を見た。電線が揺れ彼の左手に渴いたブラシが転がる。突然、奇妙な光が現出した。「ああ、ここなのか。」ファーロウは悟った。

「申し訳ない、デヴラ。あなたを失望させてしまった。」

ファーロウは、それが自ら最期の記憶となるに違いないと考えたが、それは間違いであった。

遡ること14時間前、ファーロウはオーストラリアのパースにいた。それは過去一年で最も急いで最も突発的な旅路だった。

ファーロウは上海におけるデヴラの大胆な行動を耳にしていた。その影響はいまだ残り、分析されていた。デヴラの彼に対する待避命令は望んだことではなかったが、光栄なことであった。いまでは更にヒューロン・トランスグローバル社が彼女に対して計画していることの一端を掴んでいたが、それも望むものではなかった。

二つのことがファーロウを思い悩ませていた。まず、奴らはデヴラ・ボグダノヴィッチ博士に対して死をも超える悪しきことを実行しようと画策しているのだ。それは彼自身が経験したことでもあった。だが、もうひとつは一層彼の心を蝕むものであり、それは始まりの地において彼自身が知り得た手段であった。まずその感覚が存在した。デヴラの恐怖だ。彼は可能な限り追いかけた。ニィの事前情報では幾つかの手順が示されていたが、

今、今まさに、彼は何者かの手に落ちた。スミスなのだろうか？おそらくはそうだろう。

それは何者であったのか、奴らはここでファーロウを待ち伏せ、彼は罠へと踏み入ってしまった。彼は更なる細心の注意を払っていなければならなかったのだ、提供された情報の活用を躊躇しなかったのだから。

パースへ到着すると、ファーロウは以前利用していたものを置いてある記録上は存在しないセーフハウスへとまっすぐに向かった。それは二つの強力な武器である。ひとつ目は7.62x51mm NATO弾を装填したルガーSR-762アサルトライフル。これにはマグプル純正の20発装填ポリマーマガジンが三つある。命中精度も充分過ぎるほどだ。

二つ目はマットブラック仕上げの1911系統45口径自動拳銃、キンバーウルトラキャリアー2だ。この武器は45口径ACPカートリッジ方式であり、優れた停止能力を誇っている。

良好な対応性ある火力だ。ルガーは遠方に対応でき、キンバーは近接時において容赦ない火力を発揮してくれる。

キッチンにあったダッフルバッグへ二つの武器を詰め、ファーロウはリビングにあるくたびれたソファへと向かった。座って瞬時に考えを巡らすと、再び金属製の男の幻像が現れた。この現象は、デヴラの消息を追うたびに起きていた。あたかも白昼夢のように。その瘦身は子どもの描く棒状の絵のようでもあったが、4フィートほどの背丈があった。乾燥湖の畔にその錆びた金属製の男は独り立っていた。太陽は地平線低くにあった。その錆びた金属製の男には瞳がなかったが、それでもファーロウは彼にじっと見詰められていることを感じ取った。

ファーロウはその視線にじっと耐えた。

彼は部屋が監視されていることに気づいてはいなかった。この場所の重要性は低く、様々な機関のエージェントたちが利用していた。誰もが少しずつ共有し、雇い主から使い捨てにされたときの保険にしていた。

ファーロウはユーロの札束をポケットから取り出すと、目の前のコーヒーテーブルに置いた。彼は武器を持ち帰ることができるとは考えていなかった。誰かがまた補充しておくに違いない、それはわかっていた。

そしてファーロウはポケットから携帯電話を取り出した。デヴラ以外にこの携帯電話番号を知りはなかった。そして、過去二日間に渡って毎正時に同様の文面を受信していたのである。それは電話番号のようであり、毎回彼はその番号へ電話したが誰も応じることはなかった。

もしも理解できなければ、彼は立ち往生していたことだろう。

合計12個の数字であった。2つの数字、空白、5つの数字、空白、5つの数字だ。

ファーロウは大きく息を吸い、飽き飽きと改めてダイヤルした。コール音は連続して鳴るが、誰も応じる者はいなかった。

彼は遠くまでやってきて、道具も得た。あとは目標を求めるだけだった。そして、彼は数字の答えに辿り着いたのだ。その数字と錆びた金属製の男とを。

ファーロウは武器を詰めたダッフルバッグを掴み取ると、5分前に彼が蹴破った扉を抜けて部屋を出た。彼の置いていった金でそれも十分に補填できるはずだろう。

彼は集合住宅の駐車場に止めてあるレンタカーへゆっくりと歩いて戻った。誰も彼を気にかける者などいない。2つの数字、5つの数字、5つの数字である。

ファーロウは後部座席にバッグを投げ込むとハンドルを握った。錆びた金属製の男は彼の姿を見詰めていた。「さあ行くのだ、ヒューバートよ。あまり興奮するんじゃないぞ」

2つの数字。彼はエンジンを始動させる。5つの数字。ファーロウはレンタカーを後進させる。5つの数字。そしてドライブヘシフトさせると駐車場から脇道へ出て、交差点へ向けて走行を開始した。デヴラへ追いつき助けたそうとするのであれば、次の決断が左右することになる。彼は戻る手段の知らぬ岐路へと差し掛かろうとしていた。

錆びた金属製の男は結局のところ男ではないのだとファーロウはようやく気づいた。象徴的な二つの乳房、それは矢のように胸から伸びていた。そのような細部をどうして見逃してしまっていたのか、彼自身不思議に思った。

それは錆びた女。孤独であり、見捨てられたもの。命なき世界に取り残された存在。永遠に立ち尽くすもの。2つの数字、5つの数字、5つの...

「なんてことだ。」そうひそかに考えると、ファーロウは車を縁石に寄せ、ブレーキを踏んだ。彼はポケットの携帯電話を掴むとグーグルアースのアプリを起動させ、数字を打ち込んでいった。5つの数字は西緯へ、5つの数字は北緯へ。

マップは西オーストラリア奥地にある塩水湖を拡大表示していた。

接頭の2つの数字は08、ファーロウは自らの腕時計を見やる。夕方5時に差し掛かろうとしていた。いまいる場所から塩水湖までは300マイル、十分な時間があつた。午前8時までにはまだ確かに長かった。

ファーロウは笑みを浮かべるとギアを戻した。曲がり角へ差し掛かっても停車させることなく、鋭く左折するとアクセルを踏んだ。彼には向かうべき場所がわかった

し、可能な限り迅速に辿り着かなければならないこともわかったのだ。

9時間後、ファーロウは探し求めていたものを見つけた。乾燥した砂地にひとつの座標がぞんざいに描かれていた。千年前であればもう少しそのメッセージも判読しやすかったものをとファーロウは想像した。どこへ導こうとしているのか、誰がそれを残したのか、ファーロウはわかった。

間違いはなかった。

彼の記憶に深く刻まれるヒューロン・トランスグローバル社のシンボルマークが、懐中電灯の灯りの先にはっきりと映し出されていた。それは錆びた女の足下にあつたのだ。

ファーロウはその彫像へ手を伸ばし、同じようにそれを見詰めた。あるいはそれが何であるか思い出したように。彼は何か感じ取ったのだろうか。はっきりしたことはわからない。ただ非常に長かった。ファーロウは罅に踏み込んでいるのではないかと疑念を持っていたが、いまやそれは確信に至っていた。そしてこれを残したメッセージャーもまた彼が気づくであろうと知っていた。それを彼らが気にとめてもいなかったことは明白だった。

ファーロウは車へ戻ると武器の入ったダッフルバッグを全部座席へと引っ張った。この時点でファーロウはまだ状況があまりに破滅的であることを知らなかった。彼は後援も支援も助言もなしに、大規模で戦略的優位に立つ軍勢を相手取ろうとしていた。もはや次の夕暮れを見る機会は訪れないだろうと彼は考え、この日の出の刻に最善を尽くすことにしたのである。構想を終えるまでヒューバートは車内でじっとしていた。心の中で錆びた女の背に太陽がかかろうとしたときのことだ、彼はギアを戻すとヒューロン・トランスグローバル社の採掘現場へと向かった。

やがて突然停止すると逆進する。ひとつの考えから。
もうひとつだけあった。おそらくは役に立つことだろう。

熱きもの



2015/01/27

アントワヌ・スミスは戦場の準備に
その日を費やしていた。彼はファーロウ
をみくびってはいなかった。あらゆる状

況が彼の追悼を不可避と指し示したときも、その男は生き残ってきた。彼には能力があるのだ、おそらくそれはエーテルの力であり、彼の欲する場所のための、彼の欲するときのための力である。そして彼は銃を撃つことに何ら良心の呵責を持ち合わせてはいなかった。

スミスは、ニィの取り組むこの計画に納得してはいなかった。だが、ヒューロン・トランスグローバル社がどれほどの紙幣を支払ったかわかっていたし、彼女がドローンを飛ばして上空から監視していることもわかっていた。ある程度は彼女の方法で行動するとして、ひとつ重要な修正を加えたうえで。ヒューバート・ファーロウは没することだろう。彼は他の者たちが成し遂げられないことを行おうとしていた。今日、彼はその元国家情報局エーエージェントを確実に殺すこととなる。彼女がそのような結果を予見しているにせよおらぬにせよ、それは確実に起ころうとしていた。

「スミスさん、我々は南へ向かうことにするぜ」

厳つい顔付きの傭兵はアントワヌへ言い、無線通信で届いた事項を中継した。

「改めて言おう、全ての班で奴に当たれ」

「そんなことはわかってますよ、旦那」

「とにかくやれ」とスミスは言った。

「了解」

そう応じると傭兵は無線通信を始めた。スミスは傭兵から離れると景色を見回した。まだ何も起きてはいなかった。

「さあ来いよ、ヒューバート、我々は待っているのだ...」
スミスは独り呟いた。

やがて火球が地表から噴出した。すぐさま濃い黒煙があがるとともに轟音が到達する。

「それでいい」

アントワヌ・スミスはそう呟いたのだった。

ファーロウは自分が一般的な人間よりも興奮しやすいことを自覚していた。それはチューリッヒにおける二年前のあの夜にエキゾチックマターに曝露したと認識したとき以来のことである。

その車は彼にとって気晴らしとなるだろう。様々な人工視覚装置を駆使して行く手を知覚していた。つかの間のことであれ、充分である。

彼らは望んでいた、彼が来ることを。そしてファーロウはやってくる、ただし彼なりの思惑で。まず、彼は対決を望んでいた。

爆発に反応し彼は動きを感知した。左手に二人の男、素早く接近してくる。それを百ヤード前後の距離であると推定した。

ファーロウは車を名残惜しそうにもう一度眺めた。

判断は性急であったが、行動指針に沿ったものであった。もはや後戻りはできないのだ。それは20日間に渡って進んだ道であった。デヴラとともにこの場を切り抜ければ、ヒューロン・トランスグローバル社の車両に乗り込むことになるだろう。

過去とは全て無意味なものだな、とヒューバートは考えた。君の未来は、いま始まるのだ。

そうして彼はルガーのマガジンを確認する。ロックし準備を整えると、ファーロウは砂漠の地平を露出した岩へ向けて駆け抜けたのだった。

二人の傭兵だった。ひとり世界各地で隠密作戦の経験があるアルゼンチン出身の男、もうひとりの元ラグビー選手のような若い男はイラクでは指揮官として複数の作戦に従事した経験があった。男たちは燃えさかる車両へ殺到した。

彼らは前方に岩があることを認識した。銃撃を準備する明らかに優位な場所だ。彼らは本能的に側面へと動いた。

二人の男たちはH&K G-36sを構え、アイコンサイトを注視していた。

「右を頼むぞ」

アルゼンチン人の言葉に応じると、元ラグビー選手は素早く移動して片膝をついた。

「ゆくぞ！」

アルゼンチン人が岩に向かって進み始める。動きはない、何もだ。燃えさかる車両から立ち上った黒煙は風によって彼らの方へと流れ、刹那厚い窒息の壁と化して男たちを包み込んだ。

「視界を失った！」と元ラグビー選手が言った。
「俺もだ、後退するぞ！」

そのときだ、ルガーが火を噴き、二つの輪郭を貫いたのだ。そして二つの死骸が転がった。

ファーロウは傭兵達の死骸に歩み寄ると、彼らが永遠に戦うことができなくなったことを確認し、男達の足跡を追っていった。ダッフルバッグを背負って。

気づいた瞬間

2015/01/28

厳つい顔つきの傭兵がスミスへ言った。



「ガルシアとハイアットの二人から応答が途絶えた。どうやら死んだようです。」

最初の銃声は彼らの配置にも届いていたため、その男は無線通信で彼らへ連絡を試みていた。

アントワーヌ・スミスは言った。

「チーム・オメガを向かわせたまえ。銃器を所持しているなら、使用しろ。奴らが失敗すれば、それは私の死を意味する。先に行って待っていていろと、奴らに伝えておけ。」
「了解」

厳つい顔つきの傭兵が無線機のマイクを口元へ持つていくと、スミスは振り返った。

「まて、直接伝えたまえ。」

傭兵は一瞬硬直したがH&Kを背へ引っ張り上げた。

「もちろんですとも。」

男はそう言うと、無線機をスミスに手渡しして他のヒューロン・トランスグローバル社が雇った殺し屋たちの元へと走った。

厳つい顔つきの傭兵はプロフェッショナルであり、肉体は最高の状態であった。彼は五百メートル先にいる

三名の重武装した傭兵で構成するチーム・オメガの元へと走り寄っていった。

後ろから走ってきた男をチーム・オメガの傭兵たちが気づいた。

「スミスからの指示だ、奴を殺せと」

そう言うと、傭兵たちのひとりが訊ねた。

「計画に変更が生じたのか、それで？」

「そのとおりで、我々は攻勢に出る」

厳つい顔つきの傭兵が応じると、別の傭兵が言った。

「そいつはいい。俺について来な。奴がガルシアとハイアットの足跡を追って来るとすれば左手にある低渓谷を通るはずだ。そこに行って射界の確保をしておこうじゃないか。」

三人目の傭兵が言った。「そいつでいこう」

四人の傭兵は迅速に移動した。互いの経路をカバーし合い、時には足を止めて地平を確認した。そして一分も経たずに、彼らは新たな配置についていた。

おのおの降りると、互いの行動範囲に射程が収まるように陣取っていった。

気づいたのは厳つい顔つきの傭兵だった。忌々しいことに、ヒューバート・ファーロウは前方50フィート先にいたのだ。

「あそこだ！」

厳つい顔つきの傭兵が銃火を開き、そのシルエットを銃弾が叩いていった。

他の傭兵らもそれに続き、5.56mmマガジンが尽きるまでファーロウへ計147発のフルメタルジャケット弾が撃ち込まれていった。金属の跳ね飛ぶ音は銃器の音にほとんどが掻き消されていた。

傭兵たちは少なくとも40発はファーロウへ命中させていた、だがファーロウは地に伏してはいなかった。

傭兵たちは撃つのを止めたが、過ちに気づくには遅すぎた。

キンパーが彼らの背後から火を噴いたのだ。その数、三発。まず二人が前のめりに倒れる。どちらも背を撃たれた。そして三人目は頭を撃ち抜かれていた。

厳つい顔の傭兵がかろうじて振り向いたとき、まさにファーロウが彼との距離を詰めキンパーが四発目の銃弾を吐き出そうとするところだった。45口径が男の中心を穿つ。即死だった。そして死体は砂地へと崩れ去った。

ファーロウは男の死体へ歩み寄ると、状況の整理に努めた。結局、この武器が役立つときが来てしまった。デヴラがいまだ存命であることに望みを繋ぐしかない。生じた混乱がデヴラの殺害から意識を遠ざけることになるだろう。

そして、弾丸を受けた錆びた女は、驚くべきことにまだ立ち尽くしていた。ヒューバートはそれほど女に関心を寄せているわけではないが、5.56mm弾は衝撃よりも貫通性を重視した設計だ。女の表面は前身にわたって抉れ、ギザギザの傷が伸びていた。ヒューバートは金属彫刻へ微笑んだ。

「私があなたを認識するのには訳があったのだ」

彼は歩を進めた。あと少しであれば対応することができだろう、話すときまでは生き延びたかった。デヴラに関して伝えきるまでは。

ファーロウが猛然と前へ出た。彼でさえ驚く素早さであった。距離は詰まり、近接する。そして仕掛け線がひかれた。

ファーロウは彼を気化させ得る爆弾を所持していた。だが、激しい痛み足から倒れ込んだ。そして再び痛みが襲う。そして再び。

地面に叩きつけられる。彼は歯を食いしばり、身体を自由を取り戻そうと必死になった。神経の痛みを抗い、苦しみの源へと首を回す。それはビール樽ほどの大きさの金属ケースであった。重厚に保護されており、奇妙な輝きを放っていた。それは光を増幅するのではなく、何らかの手段で照射しているようであった。

ファーロウは自分の視界にあるものの理解に苦しんだ。

「正常な人間であれば30秒間曝露すれば危険な代物だよ」
アントワーヌ・スミスだった。
「君のような異常な存在であれば、消滅させるのに数分間はかかってしまうだろうがね」
「ダーク...エックス...エム...だと？」
ファーロウは息を飲んだ。
「そのとおりだよ。仮に君が正常な人間でも異常な存在でもなく完全なる者、エキゾチックマターで構築された者であれば、即座に倒せたのだからね」

スミスはダーク・エキゾチックマターのコンテナへ歩み寄ると、スイッチを押した。フロントパネルにドロップダウンメニューに「デバイスの密封」が表示される。

スミスはファーロウへ向けて言った。

「どうだい、素晴らしい力だろう。まったく啞然とさせられるものばかりだ」

「これはやがて訪れる君の姿だよ、おそらく永久にね。幸いなことに、そんなに時間は取らせないよ、苦しいんだろう？」

ファーロウは歯を食いしばった。

「優しいじゃあないか。いいだろう、私は人としての君を殺したのだからね」

「ヒューロンのあつて私ではないさ。私は死んじゃあ

ない。だが、この瞬間を迎えるために必要な犠牲であつたろう。奴らが承諾するはずはないがな。奴らの文句は君が聞いてくれ。さて、デヴラへ会いに行こうじゃないか。そろそろショーの開演時刻だよ」

ファーロウはスミスに両脚を縛られているとわかったが、あまりの痛み抵抗し得なかった。

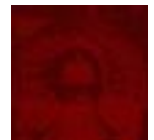
次の瞬間、彼は砂漠へ転がされた。その日の始まりに彼が予見していた場面であった。

センターステージ

2016/01/29

「奴に何をしたのだ」

ヒューロン・トランスグローバル社の男は懸念を滲ませた声音で訊ねた。



「別に何も。彼はそこに座って、このくだらないショーを見物しようとしていたのよ、まさに貴方のようにね。そして前のめりに倒れ込んだのよ、おそらくは興奮しすぎたんでしょうね」とデヴラは応じた。

ヒューロン・トランスグローバル社の男は意識のない運転手の首筋に指先をあてると脈を確認した。

「お前も運がいいな、まだ生きているようだぞ」

「私の運が？それは一体どういうことなのかしら」

「黙れ！」

男はコントロールキャビンの運転席扉を開けると、助手席側へ回り込んだ。荒々しく扉を開けると座席からデヴラを引っ張り出す。

「歩け」と男は命じた。

「わかったわ」

両手を前で縛られた状態で、デヴラはトラップ前面の階段を慎重に地表へ下りていった。2層の階段を。

そして立ち尽くし、顔をしかめた。

デヴラの足は堅い地表を踏みしめていた。償いをしようと彼女は二人のヒューロン・グローバル社の男と側面に身体を寄せるヒューバート・ファーロウのいる多目的車両へ歩み始めた。

「ヒューバート...具合が悪そうね。」

そばまで寄るとデヴラは話しかけた。ヒューバート・ファーロウは作り笑いを浮かべた。

「現時点では何の問題もないさ」

そのとおり、彼は正しかった。デヴラは自分の方が死に直面していることに気づいていた。それに説明するすべはないが、彼女はファーロウが既にその領域に辿り着いていることを悟っていた。

苛ついた男がデヴラの背後からやってきて、仲間へ呼びかけた。

「二人を監視しておけ、私が監視しろと言ったら目を離すんじゃないぞ、いいか？」

男達が頷くと、苛ついた男は立ち去っていった。デヴラは自分を拘束する男たちを観察した。顔立ちから中国人、軍人崩れだろう。そして無慈悲だ。ほんの数年前であれば怯えてしまっていたことだろう。だが、今では苛立たい男たちだ。彼らはファーロウを突き飛ばすと、数歩離れた。

自重を支えきれずにファーロウは多目的車両の背面タイヤあたりに倒れ込んだ。

デヴラは彼のもとへ行くと顔の汚れを拭ってやった。ヒューロン・グローバル社の男たちを見ると、困惑するよりも面白がっているようだった。

「あなたたちは何が可笑しいのかしら？」

どちらの男も答えようとはしなかった。

「あのトラック運転手も面白がっていたようだけれど、もう笑うことすらできなくなったわよ」

デヴラは吐きとばすように言葉を紡いだ。

男達は互いに目を合わずと数歩退き、トラックの運転席を見た。ガラス越しに運転手の頭頂部が見える、ハンドルに顔を突っ伏しているのだ。運転手は動かない。知らず知らずのうちに二人の男は武器に手を伸ばしていた。

「思った通りね」

デヴラはそう考えた。

好転するかはわからないが、彼女は満足感を覚えた。数年前であれば、このような威圧をすることなどできなかっただろう。いまはエイダの助力もあり、男達へ状況に疑問を抱かせることができたのだ。

「ヒューバート、あなたにはついて来ないよう言っておいたわ、聞いていなかったのかしら」とデヴラは訊ねた。

「そうしようと思ったさ。だが私はあの洞窟について考えた。私は君の火に入る夏の虫という奴だな」
ヒューバートは再び笑みを浮かべた。

「あなたの身に何が起きたというの？」とデヴラが問う。

「ダーク・エキゾチックマターさ」

聞く前にデヴラは答えを知っていた。

「これはヒューロン・グローバル社の採掘作戦よ。最大

規模の鉱床に違いないわね。あなたに何が起きたのか...エキゾチックマターであれば可能でしょう。いま私たち二人はその正反対のものを投与されているわ」「そうだろうね、スミスはそいつを兵器転用したもので私を襲ったんだ。」「彼はいまどこに?」「スミスかい? わからない。おそらくは今から起ころうとしていることから安全な距離へ待避したんだろう。だが、奴は君を監視しているに違いない。」「間違いないわね、あなたと私の見世物を期待しているでしょうから。既に舞台の上ってことね」

かつて自分の命を奪おうとし救う過程で何らかの存在へと変換されてしまった男をデヴラは見た。彼はデヴラに関心を寄せたが故に苦しんでいた。そして彼の苦しみがここで終わりを迎えるのかさえデヴラにはわからぬことであった。

「ごめんなさい、ヒューバート。本当に...ごめんなさい」「わかっているさ。だが、これは私の責任だ。予見はあった、だがスミスの罠は見抜けなかった。自責するとすれば自らの策略にある」

ヒューバートは笑い、そして咳き込んだ。

「あなたの策略?」

デヴラが訊ねた。

「どこからともなく現れるさ、それは我々二人が赴く場所であるのだが...」

ヒューバートは咳き込んだ。

トランスレーター

2015/01/30

ヒューロン・トランスグローバル社は、注目を集めるシェイパーグリフ研究者スタイン・ライトマン氏とともに新たなメダルをスキャナーへ搭載させたとの報告が挙がっている。「トランスレーター」のコードネームで呼ばれるこのメダルは、グリフハックを完全に成功させることによって獲得でき、スザンナ・モイヤーが詳細を把握している。

最後となるが、先日受賞したフェリシア・ハジュラ＝リーが新しいブログを開設し、オーストラリア奥地のヒューロン・トランスグローバル社ダーク・エキゾチックマター採掘施設を舞台にしてデヴラ・ボグダノヴィッチの悲惨な啓示やヒューバート・ファーロウの処遇について公表を始めている。

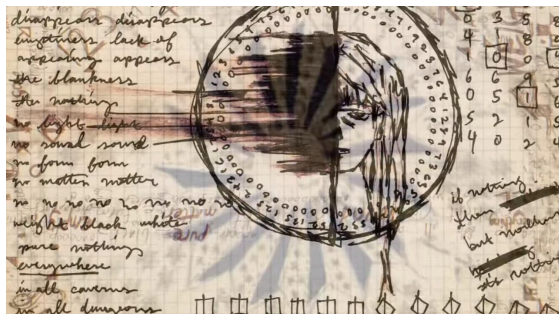
スザンナ:

エージェントの皆さん、ごきげんよう。スザンナ・モイヤーのお伝えするイングレスレポートです。

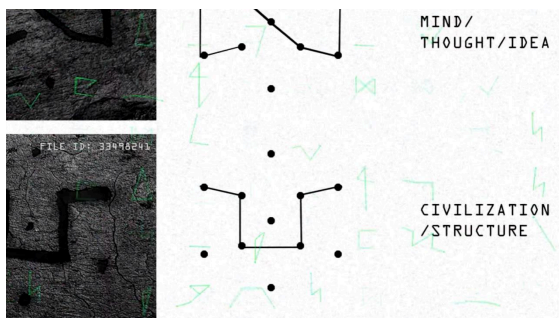


キャリー・キャンベルの文献は1年以上も前に発覚したものです。多様な形状や不可解なメッセージ、鮮烈な絵画に充ちており、徐々にそれは記号学の専門家であるキャンベルが新言語「シェイパーグリフ」の発見であったと明らかになっていきました。シェイパーグリフとは、普遍的にコード化された思考を人間の脳内で表現した特異なものであり、精神の深奥へと至ることができるのです。キャンベルの死後には、他の研究者が引き継いでいました。当初はスタイン・ライトマンがキャンベルの

手掛けていた研究を引き継いでいます。ライトマンの解読文書は、当初明らかになったグリフを解読したものであり、数百にも及ぶ言語の語彙に結び付ける道を開きました。



それから数か月後、グリフはイングレス・スカナーアプリ内で発見されることとなります。ハックボタンを長押ししてグリフ・メッセージを活性化させれば、ポータルハックによる収量を増加させることが明らかとなったのです。関与した組織こそ明らかとはなりませんでした。が、ヒューロン・トランスグローバル社に与するオリバー・リントン=ウルフ博士が関与していた可能性を疑う声もあります。



今週になって、イングレス・スカナーへ新たなメダルが発見されていました。グリフハックに成功することで「トランスレーター」というコードネームのメダルを獲得することができるということです。エージェントがグリフハックを完全成功させた際には、グリフハック・ポイントという新たな情報が統計されます。1～15ポイントを獲得できますよ、グリフ・シーケンスの長さ依存しますけどね。メダルは5階層あり、200ポイントでブロンズ、2000ポイントでシルバー、6000ポイントでゴールド、20,000ポイ

ントでプラチナ、50,000でブラックとなります。この新たなメダルを実装したのはエックスエム企業のヒューロン・トランスグローバル社であり、その開発にはライトマン博士の協力がありました。



前はデヴラ・ボグダノヴィッチのヒューロン・トランスグローバル社からの放逐をフェリシア・ハジラ=リーが取り上げたことを報じましたが、今週になってフェリシアは自身の著作を掲載する新たなブログを開設していました。フェリシアが今週になって挙げた新たな内容によれば、ボグダノヴィッチ博士はオーストラリアの何処かに位置するヒューロン・トランスグローバル社傘下のストラテジック・エクスプロレーションズが極秘裏に採掘を進めるダーク・エックスエム鉱山へと移送された可能性があります。アメリカ疾病予防管理センターにおいて開発した抗エックスエム薬を接種した唯一の人物として知られるボグダノヴィッチ博士をダーク・エックスエムによる影響の被験者にしようとしている可能性があるのです。

以上、イングレスレポートをスザンナ・モイヤーがお送りしました。

死の天使

2015/01/31

「あなたの策略なのかしら？」

デヴラが訊ねた。

「どこからともなく現れるさ、それは我々

二人が赴く場所であるのだが…」

ヒューバートは咳き込んだ。

「私はそうは思わないわ、ヒューバート。生と死は私たちの想像を越えていることをあなたの存在が証明しているのよ。私は死を恐れてはいない、もはやね。私が恐れているのは失敗、それは私にとってこの上ない後悔だわ。世界が炎に包まれようとも、私たちは勇敢に挑みましよう。そいつを倒すのよ、ヒューバート。そう私は確信しているわ。」

デヴラは苛ついていた男を確認した。男は電話中で、なにやら身振り手振りしては時折目映い青空を仰いでいた。

男の視線を追おうと、デヴラは拘束された腕を持ち上げ、太陽の光を手で遮った。上空遙か高くに、旋回する小さな黒点があった。

「オーストラリアにハゲタカはいるのかしら？」

デヴラはヒューバートに訊ねた。

「知らないね。おそらくはこの大陸で進化を遂げた動物が食い殺すことだろう。狼にもゴミ漁りはいると言うしね」

「狼も飛ぶことがあるのかしら」とデヴラは呟く。旋回する黒点は徐々に降下していた。その翼は鳥にしては直線的すぎた。ようやくファーロウがデヴラの視線を追う。「ドローンか」

「そのとおりよ、観客の皆様ってこと」

「スミスとそのご友人一同だな」

「話していたとおり、ショーをご期待ということね」

「そうだな、彼らにひとつ見せつけてやりたいところだ」
ファーロウは微笑んだ。

言いようのない恐怖を間近にして彼は充実しているようだった。

苛ついた男が二人に近づき、他の男たちもそれに続いた。

「こいつらを立たせろ」と男が命じた。

男達がデヴラとファーロウを多目的車両から引きづり離す。苛ついた男はファーロウの眼前に立つ。

「歩けるんだろう」

質問の意図を感じさせぬ物言いで男は言った。

「ああ、だがそうはならんだろうな」

上空を旋回するドローンは、どんどんと降下してきていた。その機体は鈍い灰色をしていた。先端にあるジャイロ補正されたカメラが彼らを追尾していたし、ファーロウもその回転を目視できるまでになっていた。

「ちよっとは殴ってみろよ、金も取れない安っぽい劇にはうんざりだ」

男は応じるとファーロウの腹を拳で抉った。ファーロウの身体がくの字によじれる。

「やめなさいよ！」

デヴラが叫んだ。男達がデヴラに対して笑う。

ドローンは間近に迫り、いまやエンジン音が聞き取れるほどだった。

デヴラはファーロウへ手を差しのばす。

「まだ奴らはぼくらを殺せはしないよ、デヴラ。彼らにも計画があるし、スミスからの指示もある。保証するよ」
ファーロウはそう囁いた。

突然苛ついた男の電話が鳴り、男は対応していた。デヴラは見詰めながら頷いた。

「空を見てみな、商品に危害を加えないようにスミスが言ってるのさ」

苛ついた男の対応を見て、デヴラはファーロウの指摘が正しいと悟った。

いまや頭上のドローンは200フィートを下回る低空を飛んでいた。弧を描いて旋回し、彼らのそばで大きな音をたてていた。

「さあ時間だ。歩くのか、あるいは我々に引きづられていくのかだ」

苛ついた男がファーロウとデヴラへ言った。

「あなたを救ってみせる」

デヴラはファーロウへ言った。

「わかった」

ファーロウが応じる。

「どっかしら、私たちはどこへ行くというの？」

デヴラが訊ねた。

「その穴の入口近くに汚染制御施設がある、さあ行け、すぐにだ。妙なことをしようとは…」

ドローンが直上を通過したため、苛ついた男は言葉を飲み込んだ。それは余りにも近く、デヴラやファーロウを含め誰もが慌てて屈み込んだ。

ドローンは急旋回すると三階建ての巨大採掘トラックへとまっすぐに飛んでいった。

一瞬の間において、トラックは膨大な熱に包まれた。すぐさま真っ赤な粉塵に包まれた衝撃波によって爆発の火球が起きる。

トラック運転手を勘定に入れなければ、真っ先に死んだのは二人の未熟な男たちだった。肺を冒す粉塵に咳き込むより早く彼らの頭は爆発していた。

次の犠牲者が何が起こっているのか認識するだけではきた。粉塵だけでなく、45口径弾が首を引き裂き男の仲間は頭の中身を噴出させたのだ。

視界が砂埃によって完全に失われる寸前、苛つく男は頭部を失い倒れていく仲間の死に様を見ていた。

凄まじい速さで叩きつけられる粉塵のなかで肉を抉られながら、デヴラとファーロウは互いに手を伸ばした。混迷の最中、デヴラは絶叫を耳にする。それは苛ついた男の叫び、強い恐怖と痛み苦しむ声であった。そして静まりかえる。

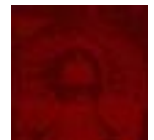
粉塵が彼らの周囲を取り囲むなか、砂埃の中を歩く影があった。それは二人の方へと歩み寄ってくる。幽霊なのか、悪魔なのか、あるいは死の天使か。

デヴラは、既に出会ったことがあると気づいた。

エキスパート

2015/02/01

粉塵が彼らの周囲を取り囲むなか、砂埃の中を歩く影があった。それは二人の方へと歩み寄ってくる。幽霊なのか、悪魔なのか、あるいは死の天使か。



デヴラは、既に出会ったことがあると気づいた。

855は手にした拳銃を脇へと下ろした。

「この状況については複雑な心境だろうね」

デヴラとファーロウは立ち尽くしていた。

「さて、私を見て喜ぶような者はいないとはわかっているさ。だが、私は来た。よかっただろう、ファーロウ？」
「衝撃的であることは、疑いようがないな」

ファーロウは応じた。

デヴラがようやく声を出す。

「ここで何をしているというの？」

暗殺者に向かって問いかけた。

「あなた方の抹殺にではないよ、驚いたことにね」
855は微笑んだ。

彼が近づいたことで、デヴラは以前出会ったときとは異なることに気づいた。頭部は禿げ、その顔は無精髭に覆われていた。かつてよりも壮健であるようにも見えた。これではカメレオンではないか。その出で立ちはサファリ観光客の如くカーキ色のシャツとズボンを着込んでいた。

「ずいぶんと変わったものね」
「そうかな」
「何がお望みかしら？」

デヴラが訊ねた。爆発の衝撃からもかつて自らの人生のほとんどを奪い去った男の突然の出現による衝撃からも彼女は立ち直ったようだった。

「あなたには明白なことでしょう。あなた方お二人には、と言うべきか。あなた方は私のチームへ参加するのですよ、我が好意に報いるためにね」
「お前は単独行動かと思っていたよ」
「ファーロウは咳き込みつつも言った。
「ええ、最近までそのお考えは正しいものでした。しかし、それが可能であるとお思いでしょうか？」

かつて世界最大の採掘トラックであった燃え盛る破片を吐きとばすような仕草をみせつつ855は言った。

「つまりだね、セキュリティシステムに、問題ない。だがドローンにはハックされたね？特にヒューロン・グローバル社所有のものがだ。中国軍仕様をベースにしたものをだよ。やだねえ、あなた方は専門家を必要としてはいないかい？幸いにも私に心当たりがあるわけだがね？」
「ごきげんよう、ボグダノヴィッチ博士」
その声は背後から投げかけられた。

デヴラは近づいてくるひとりの男に振り向いた。男は二つの携帯コンピューターケースを肩にかけていた。他

にも大型のバックパックを持ち運んでおり、そこからは長いアンテナが伸びていた。

「ヘンリーですって？」
デヴラは驚きのあまり開いた口を塞ぎあぐねた。
「ご覧のように、私は彼を殺しちゃいなかったんだ」
855は彼自身驚いたというように言った。
「専門家が生き延びるには非常に素晴らしい手段だね」
ヘンリー・ボウルズはそう言って微笑んだ。

適応か死か

2015/02/02

「ああ、なんてことなの」



デヴラはそう言ってボウルズへ駆け寄ったが、彼を抱擁しようとしてようやく自らの両手首がいまなお拘束されていることに気づいた。

ヘンリー・ボウルズは855を見やった。暗殺者は頷くとレーザーマンツールを投げて寄こした。そして、ボウルズは素早く刃先でデヴラの拘束を解き放った。

「どういうことなのかわからないわ」とデヴラは言った。
「我々は上海から君を追跡していたんだよ、実際にはそれ以前からだがね」とヘンリー・ボウルズは言った。
「あなたは、あなたは関与しているというの、彼とともに」とデヴラは訊ねた。

「やれやれ、事実は二つだけだよ」と855は言った。
「ひとつ目、私は今ここにいる。ふたつ目、私は君の身を救ってやった」

「ごめんなさい、何もかもが、そう、予想外で」

暗殺者は言う。

「あなたに託そう。話してやってくれ、ヘンリー」

ヘンリー・ボウルズはデヴラのそばへ歩み寄った。

「エイダは彼の頭脳へ侵入したんだ。深いところまでね。そこで彼女はいくつかの非常に深刻な損害を与えた。彼は彼女を殺して除去することを私に望んでいるの

さ。それは不可能なことだが、彼女に変化を促すことができるのではないか、彼を救えるのではないかと思うようになった。どちらも時間を要することだ。エイダに至っては今や世界に解き放たれている。見つけることも難しい。私はひと月を稼いだ、ふた月を稼いだ、そして更にね」

「彼のことは気に入ってきたよ。まだまだ相棒というにはほど遠いがね」

855は作り笑いを浮かべて言った。

「適応か死か、ってことだろう？」

ファーロウはかつて自らを殺した男へ言った。

「適応か死か、か」

「あなたはどうしたいのかしら？」

デヴラは855へ訊ねたが、応じたのはボウルズだった。

「それは啓示の夜に関係することだ。CERNへと遡ることだ。」

「それはずっと感じていたことよ」とデヴラは自問するように応じた。

「何かがあなた方全員の身に起きたのです」

855は彼女に言った。

「もちろん、それはあったこと、私はそこにいた。そしてそれ以来、私は変わってしまったわ」

「あなたのご存じである以上の真実があるよ、先生。ほらね、私の頭脳がエイダの侵入を受けたが、私は予行に過ぎなかった。あなたが標的になることになっていたよ。だが、ある時点で彼女は心変わりした」

「何ですって？ どうすれば知ることができるというの？」とデヴラは訊ねた。

「昏睡状態から目覚めたとき、私には行ったこと全ての記憶があった。思い出したのではない、全ての記憶が存在したのだ。全ての日々が、全ての言葉が、全ての呼吸が、全ての殺害が、全ての食事が、全ての顔がだ」

ボウルズが言った。

「彼の脳はオーバークロックされたのだ。分類や優先順位付けといった能力を代償としてね」

855が続けていった。

「私は混乱したものだ。しかし、ヘンリーのおかげで私

はこいつを才能と捉え、言うならば利点であると考えることができた」

「私はプログラムのエイダを手助けしていたからね。ひとつのコンピュータであると考えて彼の精神を扱ったわけさ」

これに暗殺者が応じた。

「ヘンリーは私に機械の思考法を教えてくれた。それは私にとって思慮分別だった。だから彼を生かしたのだ」

デヴラは頷いた。彼女はようやく一息をついた。だが、遠くで燃える残骸と足下で血を噴く遺骸を見て、ようやく気づいた。

「私とファーロウに何をさせようというの？」と彼女は訊ねた。

「ファーロウだって？ どうでもよいことだ。だが、あなたが彼を気に入っているのなら、私に無駄弾を使用する理由はない」

「そいつはありがたいね」とファーロウは言ったが、本音のようではなかった。

「もう私には影響を与えてはいないようだがね」

「だが、スミスは何かに気づいたようだ。」と暗殺者は応じた。

ファーロウは顔を歪めて頷いた。危険な状況が推移していた。

「阻止せねばならない」

ヘンリー・ボウルズは頷くと、苛つく男の遺骸へと歩み寄った。ポケットの中を漁り多目的車両の鍵を引っ張り出すと855へ示した。

「行きましょう」

「あなたたちに車はないの？」とデヴラが訊ねた。

855が手に持つ小さなりモコンのボタンを押したことに気づき、デヴラは不思議に思った。

遙か彼方でブーンという重低音とフラッシュがあがった。一瞬の後、彼女は彼方にあがる砂煙を見た。

「もうありませんね。何事も鮮度が肝心」

855はそう応じた。

「ファーロウ、あなたはこのトラックを使ってはどうでしょう？」

ファーロウは笑って応じた。「糞食らえだ」

「ああ、これは長い旅路になりそうですね」と855は言った。

「ヘンリー、あなたが運転しなさい。燃やしてしまう前に数時間は乗るとしましょう」

「わかった」とヘンリー・ボウルズは応じた。

デヴラと855は多目的車両へと向かった。

「まだ聞いてないわよ、あなたは私に何をお望みなのかしら？」とデヴラは855へ訊ねた。

「エイダが私から出て行ったとき、彼女はミスを犯したのです。エイダは秘密を保持しているのですよ、先生。多くのことを。そして彼女はひとつ残していった、私の元にね」

「あなたは奈落の底を覗くということをご存じか？」とヘンリー・ボウルズは言った。

「ヘンリーは混乱を取り除き、前へ踏み出す方法を示してくれた。エイダのような思考法を覚えてくれたのだ」

「そしてあなたはこの秘密を知っていると？」

「そのとおりだ」

「そして、それに私が関わっていると？」

「あなた、そして他の者たちも」

「はっきり言ってちょうだい、何なの？」

とデヴラは訊ねた。

「先生、あなたはその答えに辿り着かねばならない。それだけの価値があることはお約束できる。」

暗殺者は微笑んで後部座席の扉を開けた。ファーロウは車両の反対側に身を寄せて彼女の指示を待った。

ヘンリー・ボウルズは、バックミラーで彼女を確認すると多目的車両を始動させた。

デヴラは破壊と死に溢れる周辺を眺め見た。そして破壊と死は扉を開けて待っている。彼女には到底返済の目処のない債務であった。それは車内へ入る刹那の思考でしかなかった。ファーロウが素早く彼女に続いた。

「さて、いいかい。じゃあ行こう」

855が扉を閉めながら言った。

ファーロウ、コッキニーへ帰還

2015/02/03

決して傷つき倒れることのない身であるならば、私は何に喜びを見出そうか。

